２０２３年３月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「２０２３年度近畿地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度近畿地方向け放送番組編成計画」について説明があった。続いて、事前に視聴してもらった、サンドどっちマンツアーズ「映える＆コスパ最強グルメツアー沖縄 対 大阪」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜サンドどっちマンツアーズ「映える＆コスパ最強グルメツアー沖縄 対 大阪」
（２月２２日（土）総合 後７：５７～８：４２ 全国）について＞

○　観光ガイドで頻繁にとりあげられるエリアとは違う場所の紹介があったのは新鮮だったが、映像的に“映えない”し、ネタが小粒でストーリー性も弱いように感じた。４５分という番組尺の割に情報量が少なくて飽きてしまった。旅番組では“実際に行ってみたい”と思わせることがいちばん大事だと思うが、個々の店

名などを紹介できない点は、非常にもどかしく感じた。

○　“映える”というテーマで、出演者本人が撮影した写真を載せることはおもしろいが、専用のカメラを用意するなどもう少しきれいな写真や映像が見られればよかったと思う。なぜ大阪と沖縄の対決なのかは疑問であったが、勝敗をつけるという演出はよかった。普段この時間帯に放送している「ロコだけが知っている」は、何日もロケをして制作していたとのことだったが、この番組もせっかく“ツアー”と銘打って対決するのであれば、アポなしの短時間ロケではなく、きちんと事前準備を行い、ロケにも日数をかけた上でプレゼンテーションをしてほしい。広告・宣伝の関係で個別の店名などの情報は放送できないとのことだが、番組終了後に旅の行程をインターネットに載せるなどしてもよいのではないか。

○　地域の魅力をアポなしで紹介する類似の番組は民放でよく放送されているが、この番組はバラエティー的な要素も乏しく、ＮＨＫならではの学びの要素も希薄だと感じた。今後はこのふたつの要素がうまく融合すれば面白くなるのではないかと思う。

○　アポなしロケで当たり外れはあったが、取材のプロセスを見せるという点では臨場感があってよかった。一方で番組のねらいが観光ガイドを目指すのか、地域の文化を紹介するものなのかがわからず中途半端に感じた。観光ガイドだとしたら情報が足りず、地域の紹介ということであれば物語性が少なかった。また、“映え＆コスパ”を勝負のテーマに掲げていたが、テーマに沿った内容の対決になっていたのか疑問に感じた。もう少しテーマをきちんと設定すれば見やすくなると感じた。

○　昨今、グルメ番組があふれており、地域どうしの対決というテーマも民放に長寿番組が存在しているなか、ＮＨＫが後発として参入するうえでの強みが見えなかった。このような地域を紹介する番組で店名を出せないことは致命的な弱点だと思う。

○　ＮＨＫでは店名などを出せないとすると、この番組を成立させるのは難しいと感じた。もう一度見ますかと言われると難しいと思う。自分にゆかりのある県のときは見たくなるかもしれない。

○　アポなしでロケをするというコンセプトは躍動感も生まれてよいと思ったが、事前の取材がない分、紹介できる内容の質が落ちてしまうという難しい点もあると感じた。今後、“かけずりロケ”で生まれる躍動感と情報のクオリティーのバランスは改善されていくと思う。

○　ＮＨＫらしくないバラエティー番組だった。時間の制約がある中でロケをする演出のため、出演者の焦りも伝わってきてゆったりとした気持ちで見られなかった。対決形式もよいが、近畿地方向けに制作している「えぇトコ」のように、ひとつの町のグルメや特産物をじっくり落ち着いて見られるＮＨＫらしい旅番組のほうがよいと感じた。

○　アポなしでのロケは番組を構成するのが難しいと思うが、おもしろい試みだと思った。“映え”や“グルメ”をテーマにしており、珍しい食べ物がいろいろ出てきたが、「おいしい」というコメントだけで、どんな味なのか、どうやって作っているのかよく分からなかった。短い時間の中に沖縄と大阪の内容を詰め込んでいて、それぞれの地域の情報が中途半端だった。「ロコだけが知っている」の方が、テーマが掘り下げられているように感じた。もう少し「行ってみたい」と思わせるような内容になるとよい。

○　インターネットで調べた情報ではなく、出演者によるロコミのよさを生かすことが趣旨だとは思うが、少し構成が甘いと感じた。楽しそうな雰囲気は伝わってきたが、時間制限の演出により視聴者もせわしない気持ちになってしまった。もう少し事前に情報を得たうえでロケをしたり、別撮りで映像を補足したりするとよかったのではないか。店名は出せないということだが、このような番組においては出すことも検討してはどうか。

○　同じようなグルメ番組が多い中、“対決”をテーマにした点が新鮮に感じられた。沖縄では目新しい食べ物が紹介されていた一方で、大阪は定番のものが多く、食い倒れの街といわれているのに、その食文化を伝えるのは難しいことがわかった。大阪・関西の特徴や強みをどのように伝えるのがよいのかを考えさせてもらえるよい番組であった。

（ＮＨＫ側）

「ロコだけが知っている」の改善を検討する中で、タイトルを含めて刷新しようとこの番組を制作したが、各地域の魅力や住人のすばらしさを伝えるという基本的なコンセプトは変えていない。対決形式にしたのは、放送時間の中でできるだけ多くの場所を取り上げるためである。また、予定調和が視聴者に忌避される傾向があるため、アポなしロケの形式にした。店名や商品価格などの情報を放送するかどうかについては、放送法はＮＨＫに対し広告放送を禁止しており、その原則の中で、視聴者にとって必要な情報をどのように提供していくかは、今後の課題として検討していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を毎日楽しみに見ているが、インターネットのニュースを見ていると、放送前日にあらすじが載っていることがあり残念に思うことがある。これはＮＨＫが自ら公表しているものなのか伺いたい。

○　連続テレビ小説では父親が亡くなる設定がよく見受けられ、今回の「舞いあがれ！」でもそうだったが、そうしなければならない理由があるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

あらすじについては、広報目的でＮＨＫから各マスコミ媒体に発表している。ネタバレにならず、かつ視聴者の興味を引けるようなものを発表するように努めたい。また、父親が亡くなる設定については、まったくの偶然であり意図したものではない。

○　３月４日（土）のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」(総合 後 7:30～8:48、後 10:00～10:54)を見た。災害を自分事として捉えるきっかけとなるよい番組だった。

また、３月１０日(金)のかんさい熱視線「徹底可視化!南海トラフ巨大地震 ＃とっさに逃げられる街ですか」は、災害時に取るべき行動を常に想定しておく必要があることに気付かされる番組だった。

○　ドラマは、特に前編が引き込まれた。巨大地震が近づく中で日常風景のリアルな映像を見ていると、ドラマなのか現実なのか分からなくなるような感覚があった。自分の身近な場所が津波に飲み込まれていたので、自分事として考えるきっかけとなった。

翌日の３月５日（日）のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第２部 “最悪のシナリオ”にどう備えるか」(総合 後 9:00～9:59)も見たが、ドラマの出演者がスタジオで自身の経験を語るなど、視聴者がドラマの内容を自分事として捉えやすくする工夫が凝らされていると感じた。

○　パニック映像で不安をあおったり、単調に事実を伝えたりするものではなく、リアリティーを持たせたドラマ形式で伝えたのがよかった。

「かんさい熱視線」では、大学生が津波からの避難を想定した行動実験をしていたが、いざというとき安全に避難することがいかに難しいか伝わる内容であった。ＮＨＫの各地域放送局でも、同様に地域特有の災害リスクや課題について伝えるとともに、番組に興味のない人たちにいかに見てもらうかを考えなければならないと思う。都市型災害で懸念される群衆雪崩の視点がなかったことが気になった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」は大阪局のドラマ担当のチームが１年ほど前より取材を重ねて制作した。舞台は大阪、東京、高知であるが、全国の視聴者に自分事として捉えてもらえるような内容として制作することを意識した。そのうえで大阪での具体的な危険性については、関西地方向けに放送している「かんさい熱視線」で伝えるという設計にした。群衆雪崩については、人々がエスカレーターで避難するシーンの中に描き込むことで伝えようとした。また、今回は長周期地震動を伝えるために、地下と高層ビルの２か所の被害の様子を描き、シナリオ上で都市型災害の実情を伝えられるよう工夫した。

（ＮＨＫ側）

できるだけ多くの人に見てもらうことを意識し、事前の告知に取り組んだ。放送での番組告知や、梅田や難波にはデジタルサイネージやポスターを掲出したりした。こうした効果でより多くの人に見ていただけ

たと思う。

○　３月１１日（土）のＮＨＫスペシャル「海辺にあった、町の病院 ～震災１２年 石巻市雄勝町～」（総合 後 10:00～10:49）を見た。自力で逃げられない患者を置いていけないと、住民の制止を振り切って病棟に向かうという大変難しい選択を迫られた医師や看護師の遺族の言葉を丁寧に拾っていた。なかなか正解が見えない問題を無理にまとめようとせず、遺族や生き残った職員の言葉をそのまま伝えることで、よりこの問題の根深さ、重さ、悲惨さをうまく伝えていた。震災や災害の報道の際には、説明したり、結論づけたりしようとすることが多いが、それを極力排したような作り方になっていたことで、かえって視聴者に考えさせる余地を残した番組だったと感じる。

（ＮＨＫ側）

この番組については「ドキュメント７２時間」の制作班が、できるだけ当事者の声をつづる手法で制作した。制作意図が伝わったようでうれしく思う。

○　テレビ放送開始７０年記念として、日本テレビとコラボレーションした番組について、民放らしい娯楽性と、ＮＨＫらしい教育的要素が生かされていたのでよい考えであったと思う。テレビという媒体自体がインターネットに押されている面もあるため、テレビ関係者全体で協力し、可能性を追求するのはよいことだと思う。大阪局でも、在阪テレビ局とのコラボ企画が可能なのかについて伺いたい。

○　ＮＨＫと日本テレビとのコラボは、画期的で見てみたいと思わせる内容であった。メディアミックスというと、テレビとインターネット、雑誌などの紙媒体とラジオなどはよくあるが、ほかの放送局の番組がコラボするのは新鮮なので、関西でもぜひ、同じような取り組みを期待したい。

（ＮＨＫ側）

日本テレビとのコラボについては、６０年、６５年に引き続き今回で３回目である。日本のテレビ放送は昭和２５年に開始し、以降公共放送と民間放送が切磋琢磨しながら発展してきた。大阪局でも、阪神・淡路大震災の起きた１月を中心に在阪のＡＭラジオ局がそれぞれ防災企

画を制作し共同で放送する取り組みを行っており、テレビについても機会があれば検討したい。

○　３月１４日（火）の「ニッポン知らなかった選手権 実況中！第４８回 全国左官技能競技大会」（総合 後 11:00～11:29)を見た。職人の手元や専門的なプロの技を見ることができておもしろかった。実際の大会を紹介するため事前に内容が予測しにくいと思うが、出場者の細やかな様子まで撮影されており、次回以降も放送があれば見てみたい。

○　３月１日（水）の「植物に学ぶ生存戦略 話す人・山田孝之（８）」（Ｅテレ 後 10:30～11：00）を見た。擬人化表現というシュールな演出手法を使う一方で本格的な生態を開設する教養の要素もあり、Ｅテレらしくおもしろい番組だった。２本立て構成という点も、若い世代にとって見やすい番組だと思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２３年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらった、ＮＨＫスペシャル「住宅地に潜む“盛土リスク”阪神・淡路大震災　残された課題」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
生駒　京子（関西経済同友会　代表幹事）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　編集局　次長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　デジタル分野の取り組みを強化するとのことだが、動画配信サービスの普及で、最近は若年層だけでなく高齢層でも配信サービスでコンテンツを見る人が増えており、「ＮＨＫプラス」が今後どうなるかが重要だと感じた。視聴者のネット視聴が進むなかで、ＮＨＫはどのように分析をして、重点事項として掲げているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

これまでテレビの放送をどうするか、放送としてふさわしいコンテンツは何かを考えてきたが、テレビを見ていただける方の割合が急激に減ってきており、自分の好きな時間に好きな端末で、好きなコンテンツを見るという方法が想像を超えて定着していることに危機感を感じている。放送番組をデジタル発信向けに加工し、サービスを付加していくことは非常に大切なことだと認識しており、ＮＨＫのインターネット活用業務についての議論と並行してさまざまな施策を考えていきたい。

○　種別ごとの放送時間量と比率について、公共放送なので報道分野が圧倒的に多いことは理解しているが、国会中継だけで総合テレビの日中の電波を占めるということは疑問に感じている。放送全体の構造的な問題になるが、政治家の議論については思い切ってそれ自体の専門チャンネルを設置して、時間に関わらず見られるようにしないと、選挙での投票率の低下や、政治に対する無関心を生んでしまうと思う。どういう政治的な討論がなされたのかを、いつでもどこでも専門チャンネルやオンデマンドなどで見られたら、公共放送の価値も高まるのではないか。

＜「２０２３年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案）」について－諮問－＞

○　各放送局が共通して強調しているのは地域の文化や魅力、地域に根ざした情報であり、それらは大事なことであると理解している。一方で、安倍元首相の銃撃事件のような地域で全国的・世界的に衝撃のある事件が起きた時には、その地域で起きた背景を掘り下げて地域放送局から全国に向けて発信するという視点を持ってもらいたい。

（ＮＨＫ側）

近畿地方で大きな事件が発生した場合は、域内のネットワークを生かし、大阪局が近畿全体の報道の中核となって情報を伝えていく責任を負っている。東京からの視点だけではなく、その地域で起きたことを、地域なりの視点で伝えていくことについては引き続き近畿地方各放送局とのネットワークでしっかりと取り組んでいきたい。

○　諮問された「２０２３年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案）」について

は、各委員の意見の趣旨が番組編成で生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会でご説明したい。

＜ＮＨＫスペシャル

「住宅地に潜む“盛土リスク”阪神・淡路大震災　残された課題」

（１月１４日（土）総合　後１０：００～１０：４９　全国）について＞

○　盛土の問題は、熱海で大規模な土石流が発生してからよく報道されていたが、改めて阪神・淡路大震災と絡めて考えさせられた番組だった。冒頭、盛土による地すべりの被害者遺族である医師のインタビューから始まったことが印象的で、自分で家族の死亡診断をしなければならないつらさが語られており、感情的に引き込まれた。今回は被害を未然に防ぐために何をすべきかを取り上げていたが、地すべりが起きた後の現場が、その後はどのように活用されているのか知りたかった。盛土の危険性を地元の人に公表できず対策ができないという自治体の匿名インタビューが、暗い部屋だったので、悪い印象を与えていて気になった。

○　震災に見舞われた関西を中心に盛土の問題を取り上げていただいていることはありがたい。日本全国に課題があるということが理解でき、高度経済成長期に取り組んでいた事が今となって負債となっていることが分かった。特に関西地方は南海トラフ地震の被害も想定されているので、全力で課題に取り組み、企業としてはＢＣＰの取り組みをする必要があることを啓もうしてくれる番組だった。

○　雨が降っていないのに、擁壁から水が漏れていることは、地盤が崩れる危険性のサインであるなど、この番組で初めて知ることが多かった。番組内で表示されていた２次元コードから特設サイトにアクセスしてみたが、番組の内容がきれいにまとめられており、住んでいる地域で盛土リスクがどこにあるのかも調べながら番組を見ることができた。せっかくこのようなＷＥＢサイトを整備したので、

自治体の人などさまざまな人に見てもらい、住民にリスクを注意喚起する手段として活用したらよいと思った。

○　盛土の問題の背景を全国的な視点から浮き彫りにした有意義な番組だった。出演者も専門性を生かしたコメントをしており、多岐にわたる取材で今後災害を起こさないようにするにはどうすればよいかという問題提起になっていた。誰が災害の責任を取るのかについて、番組としてかなり踏み込んでおり、結局は誰も責任を負えず個人の負担も行政のサポートもできないことが分かったが、そこで終わらずさらに対応策まで踏み込んで追及してもらいたいと感じた。

○　兵庫県西宮市仁川地区の被災現場について被災者遺族の声をあまり報道できなかったと記憶しているが、それは自然災害だけでは片付けられない事故で、責任の所在が分からずストレートに考えを言えなかったからなのではないかと思う。２８年たった今だからこそ話ができること、問題にできることを取材されたのは貴重だと感じた。盛土対策の仕組みや制度の説明がされていてよかったが、備えをどうするかという解決策が明確ではなかったことが気になった。自治体や個人の取り組んだ事例を挙げていたが、あそこまでできる自治体や個人はなかなかいないと思うので、少し目線を下げて自分に何ができるかというところまで情報が欲しかった。

○　昨年の同時期に放送したＮＨＫスペシャル「見過ごされた耐震化～阪神・淡路大震災　建物からどう命を守るか～」よりも筋道立てて説明されておりよかった。震災関連番組はテーマ設定が難しく、建物や土地というハード面をどうするかということは、知らないより知っていた方がよいが、対策にかけるお金もなければ、都市部のビルのような投資資産があるわけでもない人にとっては、結局は危険な場所には住まない方がよいとの結論になってしまうと感じた。また、約５０分の長尺番組を見ることを大変に感じる人も多いのではないか。ネットでは１つの動画は１０分程度が主流になっていることからも、あえて１つの番組にする必要があるのか考え直してもよいと思う。

○　昔は分からなかった盛土の危険性が近年になって分かったということが、約５０分の長い時間でしっかりと説明されていた。住んでいるところが盛土かどうか調べる方法について、自治体の窓口や不動産業者、土地の鑑定士に聞いたり、現

在と過去の地形図を見比べることができるサイト「今昔マップ」で調べたりするなど具体的な方法も紹介されており大変分かりやすかった。「今昔マップ」を番組で実際に画面操作していたのは、視聴者はどうしたらよいのかという疑問に答える手段として有効だったと思う。

○　自分の親世代も家を建てるときに土地について調べたと聞いたことがあるので、昔から認識されている問題だとは思っていたが、この番組は最新の動向も含めて理解するよい機会だと感じた。危険な場所が洗い出せたとしても、補修には膨大な金額がかかってしまうので難しい問題ではあるが、問題提起をしていくことは重要で有意義だと思う。盛土の怖さはよく分かったが、危険なエリアでも直下型の巨大な地震がなければ大丈夫な場所もあると思うので、そういった情報もあれば安心材料となったのではないか。番組の随所に危険性のあるよう壁の特徴が紹介されていてよかったが、ＷＥＢサイトでまとめられていたようなチェックリストが番組の最後にあればなお良かったと思う。

○　何かしらの災害があった際に、住んでいる土地が危険なのかどうかを知っておくことは大切だと感じた。対策できることは少ないと思うが、知っているのと知らないのとでは対応も変わってくると思う。ＷＥＢサイトでもまとめられており、自分自身のことに置き換えて調べ、知ることができたので、それぞれの地域で優先事項があるなかで地域の住民で話し合いながら見つめていくきっかけになる番組だと感じた。

○　赤茶色の水がよう壁からしみ出していたり、道路に段差があるひび割れがあったり、番組の冒頭から映像にインパクトがあり印象的だった。日本では高度経済成長期の人口増加のために宅地を造成した背景は理解していたが、地震による危険性がよく分かった。一方で、個人で対策できることは限られていて、番組でも個人でよう壁の中に管を通して水を抜く対策をしている人がいたが、そこまでできる人は限られていると思う。自治体も個人の所有する宅地にどこまで補助をするのかという問題があると思うが、答えを出すのではなく問題提起のため番組だと思うので、危険性を理解する意味でよかった。

○　大阪北新地のビル放火事件でも報じられていた、以前の防災に関する基準では十分ではないということが思い出された。行政ができる限り情報を開示し、住民

同士で学びあい、助け合うことが結論として考えられ、ＮＨＫらしい丁寧な取材がされていた。「大規模盛土造成地マップ」も見てみたが、ハザードマップと同様に情報がたくさんあるので、関心を持ってもらうよいきっかけになったと思う。スタジオに出演していた専門家による解説も分かりやすく、盛土の老朽化は当初想定されていなかった、遅れてきた災害という指摘も分かりやすかった。

（ＮＨＫ側）

阪神・淡路大震災から２８年ということであり、地震そのものというよりは、現在になって分かってきた建築基準や盛土といった構造的・本質的な問題を取り上げた。これといった解決策が提示できない問題であるが、１人でも多くの命を守るため公共メディアとして伝えていく責務がある課題だと考え放送するに至った。すぐに解決できなかったとしても、ＷＥＢサイトでマップを確認したという声が多くあったように、人々の理解の積み重ねが被害の拡大を防ぐことにもつながっていくのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

阪神・淡路大震災に関するＮＨＫスペシャルは毎年放送しているが、どうすれば１人でも多くの命を守るために有意義な放送につなげられるかを考えている。制作したディレクターたちは主に２０代から３０代半ばで、震災当時はまだ物心がついていないような世代だ。そうした若い職員がどういう内容にするかというのを、非常に悩み苦しみながら制作した。今回は２８年たっても解決されていない積み残された課題を取り上げたいと取材を進めた。昨年同時期に放送したＮＨＫスペシャルの取材で地盤の耐震化が進んでいないということが分かり、それがきっかけとなった。盛土のリスクは日本全国におよぶ問題であるがあまり知られておらず、対策工事が行われた場所はほとんどない中で、次の被害をどう防ぐかという視点に非常に苦労したが、まずは知ってもらうことが大切と考えている。あと２年で震災から３０年になるが、繰り返し向き合って伝えていく大事なテーマであると考えている。

（ＮＨＫ側）

３月４日（土）、５日（日）と２日連続して南海トラフ地震についてのＮＨＫスペシャルを放送する予定で、ドラマパートとリポートのパートなど３部構成となっている。南海トラフ地震の対策も難しい問題ではあるが、

何が起きるか知っていれば対応にもつながると思うので、こちらもぜひご覧いただきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２５日（水）の大雪関連のニュースで、京都の山科駅で電車が止まり乗客が一晩中閉じ込められていたことに関連して、滋賀県の守山市長が帰宅困難者のために夜中に駅の構内を開放したことを、大津局のニュースで伝えていた。市長は市民からの１本の電話で動いたので、私もなにか行動を起こせばよかったと後悔し、有事の際には今までの経験や知識を生かして行動に移すことが大事だと感じた。

○　１月２５日（水）の明鏡止水～武のＫＡＭＩＷＡＺＡ～「最強！？武蔵の剣」を見た。最強と言われた剣豪、宮本武蔵について、さまざまな武道の達人が語るという内容だったが、司会も武術や格闘技に詳しいタレントで、ゲストの実演もありながら宮本武蔵をどう倒すかという話がとてもおもしろかった。それぞれの武術のバックボーンも交えていたので、達人の存在を知るよい機会になっていた。

○　２月２日（木）のにっぽんぶらり鉄道旅「“京都人の流儀”を探して　京阪電車」を見た。出町柳周辺で毎年８月の地蔵盆にお地蔵さんに化粧をする風習など京都ならではの文化が紹介されて楽しく見た。地域の魅力を掘り起こすという意味で細かく伝えていたので、制作したのは大阪局か京都局だろうと思っていたがそうではなかった。その地域の魅力を伝えるときに拠点局が制作するのかその地方局が制作するのか、それ以外なのかというすみ分けが気になった。

（ＮＨＫ側）　京都は歴史や文化が豊富であり、ＮＨＫでは京都を取り扱ったさまざまな番組を放送している。京都局だけではなく、テーマに応じて、本部の各部局でも制作している

○　２月４日（土）の探検ファクトリー「東京ドームから医療用テントまで！大型テント製造工場」を見た。この番組で取り上げられる企業はその業界では有名だと思うが、一般的には知られていないものづくりの現場が紹介されていて感心することが多い。この番組の過去の放送回のラインアップを見ると、保湿ティッシュを世界で始めて製造した製紙工場や、エレベーターのボタンだけを製造する工場、大阪局を探検する回もあり、見てみたいと思えるものが多かった。出演されているのはお笑い芸人だが、あまりにぎやかすぎず適度に笑いもあり気楽に見ることができる。さまざまな工場があることで日本の可能性を感じさせてくれるよい番組だ。

○　２月８日（水）のロコだけが知っている「大阪・広島　お好み焼きラバーを徹底リサーチ！絶品お好み焼きが続々登場！」を見た。見終わったあとのなにかしらの学びがあったが、よい意味でのＮＨＫらしさがあればさらによかったと感じた。

○　２月９日（木）のえぇトコ「国宝級のおもてなし！伝統息づく城下町　滋賀彦根市」を見た。滋賀県の伝統や歴史がよく分かった。戦国時代のかっちゅう作りから、戦がなくなって仏壇作りに技術が活用されて、そこから現代のボードゲームにつながっているという流れが、それぞれの時代の文化が現在につながっていることが感じられた。出演者が食事をする時のマナーが少し残念だった。

○　２月１０日（金）の「ニュースきん５時」を見た。東京で雪が降っていたことを長時間報道していたが、大阪発の全国放送であり、首都圏に居住している人もどれだけ降雪があるか分かっていると思うので、そこまで時間を割いて放送しなくてもよかったのではないかと感じた。番組内での車いすテニスの国枝選手が引退するというニュースでは、アナウンサーが「以前に」という意味で“さきに”と言っていたが、平たい言い方をしており、イントネーションが違っているように感じたので気になった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫ日本語発音アクセント新辞典では、“さきに”の発音については、アクセントが頭にくる言い方と、アクセントをつけない平たい言い方のどちらも認められている。「以前に、前回の」という意味での発音は、アクセントがつく言い方のみ認められている。

○　２月１４日（火）のいいいじゅー！「岩手・奥州市」を見た。自分も移住者であることから移住者がその土地でどのように活躍しているか興味があり、楽しく見ている。どの放送回もすてきで共感ができ、各地域で頑張っている方々を取り上げてもらえるのはうれしいし励みになる。今後の日本社会はますます地域に目が向けられていくと思うので、引き続き地域の暮らしを発信してほしい。

○ 連続テレビ小説「舞いあがれ！」について、視聴者の間では脚本家が変わって登場人物の性格が変わったと言われているが、見てみるとたしかにかなり違和感があった。脚本家が変わることは長期間のドラマなのでしかたないと思うが、もっと統一感を持たせられなかったのかと思う。

○ 以前に大津局が制作したおうみ発スペシャル「ザ・しがレガシー」（５月 23 日総

合 後 7:33～8:00 滋賀県域）に出演していた俳優が、「舞いあがれ！」にも出演しており、親近感を持った。地方出身の俳優が出演していると、同じ地域に住む人は視聴する動機にもなると思う。

（ＮＨＫ側）

「舞いあがれ！」について、プロットは１人の脚本家が書いており、複数の脚本家が担当することは、当初から計画していた。航空学校編では飛行機の専門知識が必要とされるので、その分野が得意な方にお願いしている。

○ 「歴史探偵」を毎回楽しみにしている。最近は戊辰戦争と外国人、その前は伊能忠敬の日本地図と切り口がおもしろく、ＮＨＫの歴史教養バラエティーはいつも深く制作されていると感じた。司会の俳優は、好みが分かれるところであり、親しみをもって番組を視聴できるというメリットがある一方で、そこまで視聴者に敷居を低くしなくてもよいのではないかと思う。にぎやかな感じのおもしろさではなく、うならせるようなおもしろさを追求してほしい。

○ トルコで発生した地震についての報道に関して、神戸のＮＰＯ法人が被災地入りをしたことが取り上げられていた。番組内で表示されている２次元コードからＷＥＢサイトを見ると、現地からの中継や写真をＮＰＯ法人が提供しているのにもかかわらず、その団体の名前が全く紹介されていなかった。取材に協力しているのであれば、提供先団体名の表示はしてもよいのではと感じた。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、「なにわＤＥオカン　オトン大感謝祭」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　編集局　次長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）

（主な発言）

＜「なにわＤＥオカン　オトン大感謝祭」
（１２月２６日（月）総合　後７：３０～８：１３　近畿ブロック）について＞

○　視聴者の方々の親への感謝を、アイドルグループ「なにわ男子」がサプライズな演出で応援するという内容で、「なにわ男子」のファンは楽しく見られたと思うが、よくあるタイプの番組で、ＮＨＫで放送する意味があるのか気になった。１組目の親子は、旅行に行きたいという母親の希望をかなえるために奈良県内を行くツアーを企画していたが、旅行をしている雰囲気がなく、見ていて違和感があった。２組目の親子は、シンガーソングライターの女性がプロレスデビューをすることを告白していたが、テレビの力を借りて告白されると親としては許さざるを得なく、最初から結末が分かりきってしまっていたので残念だった。随所に見えた親子愛は心に響いたが、ＮＨＫとして何を伝えたかったのかと思った。

○　サプライズの企画は出演者のアイドルグループだけでなくスタッフも一緒に作ったのだと思うが、打ち合わせの様子や、企画から実行するまでの様子があればよかっ

た。２組目のエピソードでは、告白されてから試合を観戦する当日までの反対から許すまでの心境の変化をもっと見せてほしかった。また試合を観戦した後も母親が本心では反対している様子が感じられて本音で話せているのか気になった。サプライズを応援するのがアイドルグループである必要があるのか気になった。

○　旬なアイドルグループを応援団に、手だれの司会や好感度が高いタレントを起用しているのであれば、もう少しＶＴＲの演出を少なくしてもよいと思った。民放のようなバラエティー感あふれる演出にしなくても、おもしろく作れるのではないかと思った。良質なバラエティー番組を制作することは難しいのだろうと感じた。

○　ＮＨＫがバラエティー番組を制作することにどうしても違和感があり肯定的には受け止められない。今回の番組は司会がいないと成り立たないほどにテンポが悪く間が長いと感じた。年末の時期ということで、「ＮＨＫ紅白歌合戦」の視聴率や注目度を上げるために、紅白歌合戦の出演者に出てもらっているのかと感じた。また、なんとか若年層の視聴者を取り込もうとしている苦労も感じられた。

○　素直に感動した。私の周囲には、女子中学生や女子高校生を子どもに持つ母親がたくさんいるが、その人たちの中にはアイドルグループ「なにわ男子」のファンも多く、みんなこの番組を見ていて、とても感動していた。ただ、番組で取り上げた一般の人たちは、どのように探し出したのか気になった。

○　視聴者の願いをかなえる番組構成は既視感があり、関西の民放の番組に類似していると感じたが、下品な表現もなく安心して見られた。１組目の親子は、バスの中やコテージで母親が心情を吐露していたことが心に響いた。サプライズのバスツアーは、親子をかなり近くの距離から撮影していたのでよく気付かれずに撮影できたなと感じた。２組目の親子のパートに関してはアイドルグループの存在意義がわからず、うまく機能していないと感じた。最初は娘がプロレスをやることをかたくなに認めなかった母親が、試合を観戦した後は認めていたが、考え方の変化が急だったので、心境の変化を分かりやすく描いてほしかった。

○　番組のタイトルから親に感謝すると銘打っているので、最後に泣けるような展開になることが最初から分かっており意外性がなかった。出演している２組の親子はどのように選んでいるのか、どういう基準で選ばれているのか気になった。

○　１組目の母親の、少し古臭くはあるが娘を思うすてきなことばに心が温まった。また、司会の抜群の安定感も番組を支えていたと思う。他の委員が指摘しているように、心が温まる番組であることは確かであり、地方・地域の人の魅力を取り上げていることはＮＨＫらしいと思うが、民放の同様の番組との差別化が難しいと感じた。

○　それぞれの親孝行の内容はとてもよく、出演していたアイドルグループのメンバーもよい働きを見せていて、最後まであっという間に見ることができた。ただ、この番組の一番伝えたいことは何かが少し伝わりにくいと感じた。

○　面と向かってだと照れてしまう親への感謝が伝えられており、温かくてよい番組だった。今回は、母親の再婚相手との関係を通して、血がつながらない家族との絆や、家族の多様性が描かれていてよかった。

○　感謝を伝えるきっかけとしてとてもよい番組だ。日ごろ思っていても言うことができない感謝の気持ちを、番組を通じて伝えることができ、温かい気持ちになった。２組の親子のそれぞれ違った形のストーリーがとてもよく、自身も両親に感謝の気持ちを伝えたくなった。

（ＮＨＫ側）

家族の話題となるコンテンツを制作することもＮＨＫの役割の１つだと考えており、これまでも試行錯誤しながら進めてきた。１２月の放送だったが「ＮＨＫ紅白歌合戦」とは直接関係はなく、放送日の調整を重ねた結果この年末の放送となった。

（ＮＨＫ側）

元々のコンセプトとして、ベタな笑いあり涙ありの関西らしいドキュメントバラエティーを制作しようと考えていた。同様の番組が多くある中で、ＮＨＫならではの演出で、多様な家族の形を通して親子の絆を描くことや、親や周りの人に気持ちを伝える後押し、反対に親の本音を子どもに伝える後押しができるのではないかと思い制作した。２組目の女子プロレスラーを目指す娘の話では、母親が最初は危険だから反対をしていると思われたが、危ないからではなく本人が挫折したときの気持ちを考えるとやめてほしかったと言っており、第三者である制作スタッフや出演者が純粋

な気持ちで理由を聞くことで本音が聞き出せたと思っている。これまで制作した３回の放送については、出演いただける方を街頭インタビューで探していたが、今回は新型コロナウイルスもあったため、３か月間かけてリサーチをして出演いただいた。また、１組目のバスツアー内での撮影は、若者を応援するという偽の番組の企画で出演者を取材しているということでクルーをバスに入らせてもらった。ＮＨＫとして質の高い番組を提供するため、本日の指摘もふまえて制作にあたりたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは教養、教育、報道、娯楽など多様なジャンルの放送をすることが使命で、このようなバラエティー番組についてはどのようにご覧いただいているのか、率直な意見をうかがいたく視聴番組にした。制作側の考え方がどうであれ、皆さまにどのように見られているのかが非常に重要だと考えている。ＮＨＫが放送する意味については、ＮＨＫと民放の双方でさまざまな手法にチャレンジしつつ、番組の質を高め合っていくことが大事だと考えている。いただいた意見は謙虚に受け止めたい。

＜放送番組一般について＞

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を見ている。事業継承については正解があるものではなく、難しいところがあると感じた。合理性や恋愛、自分の夢よりも父親の思いを選ぶという、どうしても二者択一になってしまうことはしかたないが、少し雰囲気が重いと感じた。１月４日（水）の「ぐるっと関西おひるまえ」で「舞いあがれ！」の料理指導役の方が出演していたが、ドラマの裏側を見ることができてよかった。

（ＮＨＫ側）

主人公が最初はパイロットになるつもりだったが、今では町工場が舞台となっているため、物語がどちらに向かっているのかという意見をいただくことがあるが、逆風や過酷な状況でも立ち向かって舞いあがっていくことが番組のテーマでもある。引き続き未来に向けた新しい挑戦となる物語をお楽しみいただきたい。

○　２０２２年１２月１４日（水）の歴史探偵「情報戦　関ヶ原」を見た。関ヶ原の戦いの裏にあった書状での情報戦のやりとりをデータベース化しており、そのスケー

ルの大きさはＮＨＫならではだと感じた。大河ドラマ「どうする家康」がより楽しみになった。

○　２０２２年１２月２６日（月）のヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「歌手本田美奈子.×平野綾」を見た。本田美奈子さんが白血病で亡くなったことは知っていたが、アイドル時代や、ミュージカル俳優となる経緯を知らなかったので興味深く見た。ドラマで本人を演じた平野綾さんが本田さんの母親に直接会い一緒に墓参りをしていたことや、母親も平野さんのことを娘を見ているようだと言っていたことは心に響いた。本田さん自身のドキュメンタリーパートと、平野さんのドラマパートのほかに、本田さんを描いた漫画のパートがあったが、その部分が必要だったのか疑問に感じた。さまざまな業界で活躍した女性をひとりひとり丁寧に取り上げることは励みになるので、ほかの放送回も見てみたい。

○　２０２２年１２月３１日（土）の「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。紅白歌合戦から「ゆく年くる年」を続けて見ることは年末のだいご味だと思う。

○　１月１１日（水）の「おうみ発６３０」を見た。滋賀出身の俳優の堀田真由さんにインタビューをしており、そこで初めてドラマ１０「大奥」が放送されていることを知った。ＮＨＫプラスで第１話を見たがとてもおもしろかった。冨永愛さんの演技もすばらしく、話が痛快で、昨日はリアルタイムでもみた。

○　「探検ファクトリー」をよく見ている。他の番組では取り上げることがあまりないニッチな製品を紹介しており、製作過程など初めて知ることが多く、ものづくりに興味を持つきっかけにもなると思う。土曜日の昼間に放送しているためか、テロップも多用して家事や食事をしながら見ても視聴者がついていきやすいように工夫がされていると感じる。

○　一連の震災関連報道を見た。１月１４日（土）ＮＨＫスペシャル「住宅地に潜む“盛土リスク”阪神・淡路大震災　残された課題」はＣＧ映像も多用して自然科学のメカニズムを解明しており、解決までの道筋を考えることはＮＨＫの真骨頂だと思った。復興費用の問題など政治や行政のあり方にも切り込んでもらえればさらに見応えがあると感じた。

　１月１５日（日）の明日をまもるナビ「阪神・淡路大震災　防災のバトンをつな

ぐ」を見た。災害や未来への継承は往々にして伝えなければという義務感が出てしまうが、終始明るいトーンで番組が進行していき、次の世代が防災を自発的に語っていてよかった。以前、民放では阪神・淡路大震災の起きた１月１７日にかけての深夜にナレーションなしで当時の映像を流していたことがあった。番組として成立させなくても、映像を流すだけでも震災を語り継いでいく一つの材料になると思うので、震災について膨大なアーカイブがあるＮＨＫでもそういう機会を持ってもらいたい。

○　昨日で阪神・淡路大震災から２８年を迎えた。オールＮＨＫで震災報道に取り組んでいる様子がうかがえ、改めて震災は忘れてはならないと感じた。今はまだ民放各社も取材しているが、国際放送することを含め、多角的で細やかな報道はＮＨＫにしかできないことだ。ＮＨＫの持つ人とのつながりから震災を忘れず大事にしていこうということが伝わりうれしかった。

○　「その時　取材者は」という、元ＮＨＫアナウンサーと映像編集者、空撮のカメラマンの当時の体験を振り返る特集があったが、映像の終わりに震災を経験していない若い職員のコメントが入っておりよかった。元アナウンサーの方が、阪神・淡路大震災を経験していない人にも当時何があったかを知ってほしい、謙虚に向き合ってほしい、と言っており、謙虚に向き合うとはどういうことなのか考えさせられた。

○　１月１３日（金）のかんさい熱視線「作って食べて生きて～阪神・淡路大震災からの日々～」をＮＨＫプラスで見た。この番組は食べ物を通して、阪神・淡路大震災で被害に遭われたり家族を亡くされたりした方々を取り上げており、今までにない新しい切り口だったと思う。料理を作ったり食べたりすることで亡くなった人を静かに思い、その人だけの思い出を大事にしている様子が印象深かった。当時の深い悲しみが静かな悲しみに変わっていっていることが伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

今回は阪神・淡路大震災から２８年ということで、若い記者やカメラマンが積極的に取材をして、昨年末ごろから連続して放送した。１４日（土）にはこれからの防災に役立つ盛り土のリスクを問題提起するＮＨＫスペシャルを大阪局の制作で放送した。昨日は夕方のニュースの冒頭３０分間

を神戸局から中継し、その後も含めて約１時間震災関連のニュースを伝えた。今年の追悼のつどいで灯された灯籠の文字にもなった“むすぶ”ということばどおり、これからにつないでいくという思いで取り組んでいる。近畿地方では若い職員に１７日の前日から神戸に応援に行ってもらい、取材をしつつ朝の黙祷に参加し、ジャーナリストとして現場の空気を体感してもらった。ことしはＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢに特設サイトを作成し、デジタルでの発信も強化した。

（ＮＨＫ側）

阪神・淡路大震災から２８年ということで何度でも伝えることが大切である一方、常に新たなメッセージを探し求めて取り組んでいる。「ＮＨＫスペシャル」では、改めて自分の地域のハザードマップを見たという反響がＳＮＳで多く、一つ役割を果たせたと感じている。「かんさい熱視線」については、ご家族を亡くされた方の思いは癒えることはなく、逆に深まっていく切なさを食を通じて描くという挑戦だったが、視聴者に届くメッセージになったと思う。

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を見ている。東大阪の企業が中心になっており、その家族の生きる姿がわかりやすく描かれていると感じている。中小企業の後継者問題は大きな問題になっており、特に関西には中小企業が多いため、よい問題提起をしてくれたと思う。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を一部分だけ見た。放送時間が長いので、すべてを見ることが難しい人も少なくないと思った。男女対抗という構図から別の形にするか、会場を地域で持ち回りにするなどの工夫があってもよいかもしれないと思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、物語を、奈良から。「記憶継（つ）なぐ　革の里～宇陀市　菟田野～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜物語を、奈良から。「記憶継（つ）なぐ　革の里～宇陀市　菟田野～」
（１１月１１日（金）総合　後７：３０～７：５５　奈良県域）について＞

○　菟田野という地域では革産業が有名なことは知っていたが、産業化されたのは明治時代からで、古くから奈良にあった文化とは違うことに驚いた。「記憶継（つ）なぐ　革の里」というタイトルだったが、番組のポイントは、においであると感じた。テレビだと伝わりにくいにおいについて、前半でアナウンサーが工房のにおいをリポートし、後半でも職人の妻がにおいについて話していたためイメージしやすくテーマとして話がつながっており興味深かった。鹿革が牛革や他の革となにがどう違うのか、特徴がもう少し分かればよかった。

○　菟田野の革産業の始まりから現在までをたどっていたが、未来への取り組みにつ

いての話があってもよかったと思う。この産業を後世に残していくのであれば、“ふすべ”が３日もかかる、ものすごく手間のかかる作業であるということももちろんだが、見た目やにおい、機能性などでほかの革製品に比べて優れていることが伝われば、さらによかった。番組の放送時間が短く、宣伝につながりかねないこともあって商品や店舗の情報を伝えることはできなかったと思うが、宇陀市の鹿革産業を奈良県民に広く知ってもらうことが番組のねらいだと感じた。

○　宇陀市の鹿革産業について一般的にあまり知られていない歴史や現状を伝える大変よい番組だった。奈良や京都をとりあげた番組では古くからの歴史を切り口とすることが多いが、近代から始まった産業とその変化、衰退の危機などを描くことで奈良の多様性を知ることができた。山間部で猟師が鹿を狩ることは、奈良に限らずいろいろな地域であったと思うが、奈良だけで鹿皮加工が産業化された理由が気になった。地元の鹿以外にも輸入品も原材料にしているという話もあったが、どの程度の割合で使用しているのか知りたいと感じた。

○　奈良県に鹿革の産地があることはまったく知らなかったことであり、奈良産業の意外性をかいま見られたことがおもしろかった。剥製師が仕事だけでは食べていけず、継承していくことは無理だと言っていたことは現実を語っていて印象に残った。職人たちから前向きな発言が少なかったということも含めて、鹿革産業を取り巻く状況が変わる可能性も見えにくく寂しい未来しか見えなかったが、現実に直面している問題を脚色せず伝えていたのはよかった。鹿革についてはあまり知らない人が多いと思うので、優れているところなど鹿の革の特徴も説明してもらえるとなおよかったと思う。

○　タイトルが番組内容にすごく合っていてよかった。文化を引き継ぐということばも出てきていたが、伝統産業が持つ豊かな世界を見ることができ、子どもたちにそういった世界を教えてあげられれば不登校や引きこもりも解決できるのではないかと感じた。この番組を見た人が鹿革の存在を知って、革の可能性を感じて未来につなげられたらよいと思い、見終わった後も満足感があった。鹿が多い奈良だから鹿を使っているのかどうかが気になった。

○　宇陀市には行ったことがなく、紀行番組でよく見る場所だったため興味深く見た。革を煙でいぶして色づけをする“ふすべ”という失われた技術を、長年の研究の結果

再現することができたと紹介されていたが、再現のための試行錯誤についても、もう少し知りたかった。全体を通してにおいに起因する記憶がテーマの一つとしてあったように感じたが、このようなテーマをよく考えたなと驚いた。脳科学的ににおいが幼少期の記憶を想起させることを知っていてこのような構成にしたのか、制作の過程が気になった。

○　さまざまなことを考えさせられたよい番組だった。この番組のテーマの一つに産業の継承があると感じたが、地場産業の世代継承は日本全体で議論して戦略的に取り組んでいく重要なテーマであり、一つの地域局だけで取り組むというよりはＮＨＫ全体で取り組んでもらいたいと思った。鹿革製品の需要が今後どの程度見込めるのか分からなかったので、そのあたりをより掘り下げてほしかった。

○　鹿革産業は衰退していく産業で、廃業している方も多いと思うが、国内の９５％が菟田野の鹿革を使っているということは、最低限の需要はあるのだと感じた。今後この産業を継承してくためには、その仕事で食べていくために職業としてどういう風に成り立たせていくのかということが重要だと思う。最後の方に林業家とコラボレーションして鹿革を広めようという試みが紹介されていたが、今後何か進展があればぜひ見たいと思った。

○　においで昔からの産業を思い返して次につないでいく伝統の継承というところが、タイトルにもつながっていると思った。牛や羊の革はよく目にするが鹿革は触ったことすらなく、展示会では適度に柔らかく好評だったと言われていたが、鹿革を使った製品がどのように使われているのか、どのような製品があるのか紹介があってもよかった。剥製師の人は生活が成り立たない仕事だと話していたが、自身はとても楽しそうに剥製を作っているのが印象的だった。

○　動物愛護が時代の流れになっており、毛皮や剥製などの製品は時代に受け入れられないところもあると思うが、有効活用をしていることをうまく伝えていくことができればよいと思った。さまざまな分野で課題となっている後継者問題については、問題提起に終わらず解決策についても探ってほしい。番組を通して現状を広く知ってもらうことで、サポートに向けた動きのきっかけにもなると思うので、地場産業の世代交代について集中的に放送することもぜひ検討してほしい。“ふすべ”については、試みはすばらしいが目やのどの健康被害があるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

「物語を、奈良から。」というタイトルは、奈良局が２年前に新しい放送会館に移転をして、奈良局のブランディングを考える際に作ったもので、奈良にあるさまざまな歴史を改めて掘り起こして、新しい物語を視聴者のみなさまと一緒に作っていくことを意味している。この番組は紀行番組として風土を描くことを大事にした。旅番組というと楽しく、観光スポットを巡り地域の美食を食べて、視聴者が旅をしているかのような気分になるような番組だが、今回は一切食べ物や観光地は登場せず、文化や風土を描くということを意識した。制作スタッフもほとんどが奈良局の職員で、地元密着だからこそ掘り下げて、普段は取り上げられないようなところをしっかりと伝えることができたと考えている。

（ＮＨＫ側）

番組で紹介した鹿革は、大部分は獣害駆除された鹿を使っているが、産業として安定供給が難しいので中国から輸入もしており、菟田野は原料加工から縫製、販売までの一貫したシステムを備えている全国でも数少ない生産地というところに着目した。においがテーマとなっていることについては、制作当初から考えていたわけではなく、ディレクターが取材をした映像を見ていく中で浮かび上がってきた。においは記憶に深く結びついており、愛情だとか郷愁だとかよい記憶だけではなく、忌み嫌ったり遠ざけたりすることにもつながるので、最後まで議論が続いた。タイトルの「継（つ）なぐ」ということばは、常用漢字での読み方にはないが、菟田野で産業の現場を取材して、収入を得るだけでなく、それ以上の思いなどを次につないでいく様を表現することばを考える中で出てきたことばであり、これをタイトルとした。

＜放送番組一般について＞

○　「ＮＨＫプラス」の関西地方のプレイリストから、沁（し）みる夜汽車「８３才の通学電車　大阪メトロ御堂筋線」を見た。タイトルでは電車関連の番組かと思ったが、ほとんど電車は関係なく、出演していた夜間中学に通う男性が阪神・淡路大震災で家族の大半を亡くされた遺族でありながら、非常に前向きで感心させられた。制作が大阪局ではなくＮＨＫグローバルメディアサービスとのことで、恐らく震災で取材をしたのではなく、たまたま原点が阪神・淡路大震災だったということだと思

う。大阪局内でこの番組について情報共有がされていたのかが気になった。

（ＮＨＫ側）

取材段階から、制作している関連団体と大阪局で情報を共有している。今後も地域を取り上げた番組をさまざまな形で展開できればと考えている。

（ＮＨＫ側）

ＢＳで随時放送しているこの番組について、大阪局では関西を題材にした放送回を選び日曜の夕方に近畿地方向けに総合テレビで放送している。引き続きご覧いただきたい。

○　１２月２日(金)のかんさい熱視線「もう一度この教室から　再出発・高校生の８か月」を見た。不登校や人間関係、勉強に問題を抱えた生徒とそこに寄り添う先生が取り上げられており、文化祭に向けて人間関係を築いていこうとする生徒たちのやりとりが丁寧に取材されていた。番組の中でＳＮＳでの友達のことばが支えになったという話が印象的で、小さなメッセージだがそういう心あるサポートが必要とされているということを学ぶことができた。

（ＮＨＫ側）

地域に密着した番組を制作できるよう引き続き取り組んでいきたい。

○　１２月５日(月)から放送されている趣味どきっ！「茶の湯　裏千家　一陽来復」を興味深く見ている。お茶に関する番組は三千家を取り扱ったものが多いが、日本各地に地域に根付いた独自のお茶の流派があり、お点前もそれぞれ違う。今後はさまざまな流派のおもしろさも取り上げてもらえると茶の湯についての理解が深まると思う。

○　１２月９日(金)のかんさい熱視線「遺族たちの“その後”　大阪・クリニック放火事件から１年」を見た。遺族がこの１年どのように過ごしていたかを丁寧に取材していた。放火をした男性もクリニックに通っていたため、ＳＮＳには亡くなった方も放火犯と同類と書き込みをされていた。遺族の人たちは家族を亡くした悲しみに加え、被害者であるのにさらに精神的な被害を受けるという矛盾を生んでいると思

う。遺族に支払われる給付金も亡くなった方の当時の収入などで大きく違っており、そうしてランク付けしてしまう国の制度にも疑問を感じ考えさせられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

事件発生当初から、遺族への取材は難しく記者も悩みながら向き合ってきた。被害に遭われた方々がどう生きてきたのか、遺族の方々がどう過ごされてきたのか、事件が何を突きつけてきたのかをしっかりと伝えたいとの思いで取材を重ね、今回１年という区切りでお伝えした。いわれなき差別や、被害者の給付金の在り方という課題もあり、しっかりと伝えることができた。今回の番組は近畿地方向けだったが、給付金の問題については１２月１７日（土）の「ＮＨＫニュースおはよう日本」や「ＮＨＫニュース７」でもお伝えした。引き続き事件を風化させないために取材を続けていきたい。

○　１２月１２日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「ヘリコプターが飛ばなくて」を見た。ある会社が福井空港とディズニーランドなどを安価でヘリコプターで結ぶと発表し、ＮＨＫも含めたマスコミ各社が報道していたが、いつになってもヘリコプターが飛ぶことはなく、発表をうのみにして報道をしたことに責任を感じた福井局の記者が追跡取材をしていた。会社のずさんな実態や空港を運営する県の実態を徹底的に追跡取材してくれたことに驚いた。結局運航は始まっておらず、もやもやした感じもあるが、一方で福井空港の新たな動きも紹介され、期待感もあった番組だった。

（ＮＨＫ側）

入局１０年程度の福井局記者とディレクターが制作した番組で、内容はＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢで読めるのでぜひご覧いただきたい。感想は現地局にも伝えたい。

○　１２月１４日（水）の歴史探偵「情報戦　関ヶ原」を見た。歴史探偵の普段とは違う切り口で、文書のやり取りから見る関ヶ原の戦いというのはおもしろかった。家康の功績や表面的な歴史は知っていたが、各大名に手紙をたくさん送り、関係性を作っていたことに家康の人間味をかいま見ることができた。

○　関ヶ原の戦いは１日の短い戦いとは知っていたが、その裏で大名間で文書を利用した情報戦があることは知らず驚いた。番組の中で500通を超える手紙をデータベー

ス化しどの単語がよく出てくるかを解析したり、手紙が行き交っていた様子を日本地図上に可視化したりしていたが、データ分析といえないような単純なものであり、結果の解釈も恣意的にされているように感じた。

○　１２月１８日(日)の鎌倉殿の１３人「報いの時」を楽しく見た。北条政子の描き方が興味深く、同じ脚本家である「真田丸」もおもしろかったが、女性の役割が限定されていたように感じた。女性を主人公にした大河ドラマについては歴史上の役割を過大に描く傾向があることから賛否両論があるかと思うが、ひきつづき女性を取り上げてもらいたいと思う。

○　「アニメ　弱虫ペダル　ＬＩＭＩＴ　ＢＲＥＡＫ」を見た。番組の中で実際にない名前の筋肉が出てきており、ないことばを作りあげてさもあるかのように言っていた。ＮＨＫということもあるが、番組を見ている子どもたちが間違った知識を得てしまうことにもつながりかねず気になった。

○　そろそろ屋外においてのマスク着用の扱いを考えたほうがよいと思う。自分の心を吐露する映像などでは、マスクを着用しているだけで台なしになってしまう。厚生労働省が屋外でのマスクの着用は原則不要と言っている中で、意識的に取り組まないとこの先ずっとマスクをしている人が映る映像ばかりになってしまう。放送局にとっても損失だと思う。

（ＮＨＫ側）

　スタジオの中では感染対策をとっているので、出演者や記者ともにマスクはしていないが、屋外ではマスクを基本的に着用している。どこかのタイミングでルールを整理する必要があるということはまさに指摘のとおりだと認識している。ＮＨＫ全体で検討をしていきたい。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」の出場者の選考が話題になっていた。若年層に見てもらいたいということも重要なテーマだが、出演者の選定だけで若年層に見てもらえるかというとそうではないと思う。「ＮＨＫ紅白歌合戦」は単なる歌番組ではなく、歳時の一部として生活文化に組み込まれているもので、コミュニケーションツールだったり、生活や人生を豊かにするものだったりすると思う。こうした点を掘り下げてみ

るとお目当てのものだけを選択して見るという風潮から一線を画したテレビの可能性が見えてくるのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ紅白歌合戦」については、どのような形が視聴者のみなさまに喜んでいただけるか、ＮＨＫ内部でも検討を重ねている。いただいたご意見は本部へ伝えたい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「書いて　読みあい　育ちあう～子どもたち“心の作文”～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
生駒　京子（関西経済同友会　代表幹事）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜かんさい熱視線「書いて　読みあい　育ちあう～子どもたち“心の作文”～」
（１０月１４日（金）総合　後７：３０～７：５７　近畿ブロック）について＞

○　作文の授業をする先生の取り組みや、ほかの先生や児童たちの姿など、どれをとってもすばらしく、とてもよかった。２人の女の子のけんかのシーンは、学校ではよくあることだと思うが、それぞれ個別に話を聞いて心の内面まで聞き出していることに驚いた。相当丁寧に学校や児童、保護者との信頼関係を構築した結果だと思うが、どれくらいの期間をかけて取材をしたのか知りたくなった。子どもが自分自身と向き合って作文を書き、担任だけでなく複数の先生が読んで話し合い、それを受けて子どもたちにフィードバックしていく一連の流れが子どもに寄り添う教育だと感じた。

○　子どもたちの学校生活の現状に着目しており、子どもたちの心を問いただすのではなく文章で可視化し、お互い分かり合えるようにしている授業がすばらしく、胸に刺さった。今、教育の現場が多くの課題に直面する中で、今回小学校の現状を番組にしてくれたことは大変意義があると思う。何になりたいと聞かれても分からない、目標がないと答える子どもが多かったり、先生のなり手が少なかったりするが、こうした教育現場に焦点を当てた番組がもっとあってもよいと思う。

○　作文という表現を通じて子どもたちが自分の意見を発信できる場があることはすばらしいと感じたし、答えを教えるのではなく、隣で一緒に考えたり、考え方を教えたり、伝える力を伸ばす授業をしていることがよかった。先生や児童、保護者との信頼関係があるからこそできることだと思った。子どもたちの細かい動きを捉えたり、子どもたちの気持ちにも配慮したり、すごく大変な取材だったのではないかと思う。思考・判断・表現する能力を重視するように学習指導要領の内容が変わったが、作文のような自己表現力を高めていく授業の重要性も番組から感じることができた。

○　テーマを定めずに書きたいように自分の思いを書く「心の作文」は、コロナ禍での子どもたちの友人との関係や心のケアにとても重要な教育だと感じた。定年退職された先生の経験を生かすことも有意義であり、いろいろな世代の先生と児童が触れ合うことで視野も広がると思う。この作文の取り組みは、大阪の小学校が積極的に取り組んでいる特徴なのか、または、番組で取り上げられていた小学校だけの特徴なのか気になった。

○　番組として取材もしっかりとされており、テーマ設定も構成もよかったが、ＳＮＳやデジタルについての視点が番組内で触れられていなかったので、少しもやもやした。子どもたちを取り巻く環境で昔から一番変わったことはスマートフォンの普及やデジタルの発達であり、それが故のコミュニケーションの難しさが生まれてきていると感じているので、その視点も欲しかった。クラスや友達間、先生や児童との教室内でのできごとが番組をとおして公にさらされてしまうことで、よい思い出になることもあるかもしれないが、後々悪い影響を与えたり、ほかの先生の負担になったりしないか気になった。

○　この３年間、コロナ対策で外部の人たちが入れなくなって本当に学校が見えなく

なったが、長期の取材からマスクをしている子どもたちの様子や、学校の様子が見られたことに安心したことに加え、人と人との接触に制限を強いる社会で自分の意見を言えていないのではないかという先生の指摘に納得した。他者と関わりがなければ得られないことや、子どもが気づいていないその子のよさを、大人が伴走しながら読み取ってその子に分かるように関わっていってあげることが教育の神髄であるとのことばがあったが、学校の目的がまさにそこにあると実感した。学校の取り組みを知る手段はたくさんあるが、なぜこの学校を取材して、どのようなメッセージを伝えたかったのか気になった。

○　副題が印象的で、特に“育ち合う”という部分は教育においても重要な部分であり、今回は小学校での話だったが、教育者全般にとってためになる話だった。心の内や家庭環境、プライベートなことをさらけ出すことは簡単ではなく、先生方がそれぞれの児童の気持ちをさらけ出す意識をクラス全体に醸成させるには多大な労力があると感じた。女の子が自身の心境について図を書いて整理していたが、その中に「殴る」ということばも書かれていて少しショッキングだった。

○　番組冒頭から父親の転勤や、とんかつは鳥かつには勝てない、などの子どもたちの自由な作文にぐっと引き込まれた。書きたいことを書きたいように書くという当たり前な内容で番組が成立してしまっていることに、教育の仕組みに対する疑問や、大人が決めた枠組みに沿って子どもを教育していることに対するメッセージがあるように感じた。心の内を書く作文の授業は、人生経験からくるいろいろな引き出しがないとできないと思うので、今回のように定年退職した先生が教えられれば今の教育に不足していることが補えるのではないかと感じた。

○　小学生にとって自分の気持ちを表現することは難しい上マスクをしていると表情がわかりにくく、話しづらいため表現もしにくくなる。その中で作文という手段で、気持ちを表現することはすばらしい取り組みであり、最初は恥ずかしいかもしれないが、できるようになってきた時は自分の意見をもてるようになると思うので、こういう取り組みは広まってほしい。

○　なんでも書きたいように書くということで、さまざまな作文が出来上がっており、インタビューで女の子がみんなのことがいっぱい知ることができるからうれしいと答えていたが、そういうメリットがあるのだと気づかされた。先生たちもすべての

作文を複数人で読んで、子どもの気持ちの変化や成長を議論し、それをまた生徒にフィードバックしていくという一連の流れに意味があると感じた。気持ちを文字にするのは難しいが、小学生のころから文章を書くことが当たり前のようになれば、自分の気持ちを人に伝える能力が身につき、逆に人の気持ちをくむこともできる人に育っていくと思った。

○　丁寧で上手に制作された番組だと感じた。先生方からも熱意が感じられ、子どもたちの成長する姿も心が温まった。コロナ禍で子ども同士の距離ができたことは、小学校から大学まですべてにおいて非常に大きな問題だが、そのなかで好きなように作文をさせるという指導は興味深かった。先生のなり手が少ない中、こういった番組を見て学校の先生になりたいと思ってもらえるきっかけになればよいと思う。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は学校と児童、保護者の理解があって番組となった。大阪局には児童向け、青少年向けの番組を制作するグループがあり、今回もそのグループと経験や知識を共有しながら制作した。

（ＮＨＫ側）

担当のディレクターがコロナ禍になる前に先生と出会って取材を続けてきた。コロナ禍で、子どもたちの心の問題や、コミュニケーションなどについて関心が高まったのでこのタイミングで番組として放送した。今回取材した学校については半年以上通い続け、先生方を通じて、保護者のみなさまにも手紙も書いて信頼関係を構築していった。作文を通じて子どもたちの関わり合いを作っていこうという考え方に本質的なメッセージを感じてもらえたのではないか。けんかのシーンを使用することは制作スタッフでも最後まで議論を続けたことだが、先生方や保護者の方にも事前に説明をしたうえで、他者とのぶつかりあいを乗り越えることも大事であるため、そのまま放送してほしいと言っていただき使用した。

＜放送番組一般について＞

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を毎日見ている。人力飛行機の話から友人の話

など、ハラハラさせる展開があり毎日見るのに飽きない。第７週から五島列島が再度登場し、どのように五島がでてくるのか楽しみだったのでうれしい。主人公の幼なじみが仕事を辞め五島に来たが、つらいときは思い切って環境をかえるという選択肢があることを制作者は伝えていると感じた。五島列島ではコロナ禍の前からワーケーションの取り組みを積極的に推進していたようなので、それを紹介する番組も見てみたい。

（ＮＨＫ側）

脚本家の方は大阪局のＦＭのラジオドラマの脚本コンテストで最優秀賞を取られた方だが、耳に障害があり、誰かに優しくなれるようなドラマにしていきたいと言っている。逆風を力にして羽ばたいていく裏側には、人に優しくなっていくことがあることをテーマとしている。

○　１０月１５日（土）の探検ファクトリー「ドラマ舞台の街　超絶技術者大集結照明器具工場」を見た。連続テレビ小説の舞台がなぜねじ工場なのかと疑問に思っていたが、東大阪の工場の多様性について理解が深まった。

○　１０月３０日（日）の民謡魂　ふるさとの唄「山口県下関市」を見た。日本の民謡を伝えるＮＨＫならではの番組であり、白河踊りを通じて、いまだ敵同士とみられがちな福島県と山口県の交流を知らせる有意義な番組であった。

（ＮＨＫ側）

多くの動画コンテンツがある現代だが、全国をまわって公開収録をしており、民謡はＮＨＫでしか見られないコンテンツとして、引き続き伝えていくべきことだと感じている。

○　１１月４日（金）のかんさい熱視線「脳科学者と認知症の母」を見た。科学者として母の認知症を客観的に見ている部分と、だんだん笑うことも感動することも少なくなっていく母をつらい気持ちで見ている娘としての部分の葛藤が捉えられていて、胸に迫るものがあった。

（ＮＨＫ側）

担当のディレクターが、長期間継続取材を続けてきたものであり、ディレクターの持つ専門性を生かして制作を進めている。今後も何らかの形で

みなさまにお届けしたい。

○　１１月６日（日）の超絶！パリ五輪新競技　ブレイキン「関西ブロック選手権2022ハイライト」（総合 後6:05～6:43 近畿ブロック）を見た。ブレイキンはパリオリンピックの新競技になったが、元々知名度が低かった競技が少しずつ日の目を浴びるようになると感じている。今回は関西ブロック大会が放送されたので、全国大会も放送されるのか期待している。ダンサーが一対一で踊っていたが、カメラが踊っていないほうの選手に何度かかぶってしまっており、もう一方の選手が見えないことがあった。初めての放送なので状況が予想しづらかったと思うが、視聴者がより見やすいように工夫してほしい。

（ＮＨＫ側）

初めての試みで予想外のことも多くあったが、工夫を重ねてよい番組にしていきたい。「ニュースきん５時」では障害のある方のブレイキンを紹介した。新しい競技だが、多様で多彩な方たちが取り組まれている競技なので、そのあたりも含めて制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

大阪は競技の第一人者がいることからも非常に盛んであり、「ほっと関西」にも出演していただいて披露していただいた。なじみのない競技ではあるが、今回の近畿ブロック大会の放送は、オリンピックに向け伝える側の経験やスキル向上にもつながったと感じている。

（ＮＨＫ側）

ブレイキンは北海道や東北地方でもブロック大会を放送した。全国大会はＢＳ１で放送を予定しており、今後も新競技を盛り上げていきたい。若い人が挑戦する姿は希望や勇気を与えてくれるので公共メディアとしても応援していきたい。

○　１１月６日（日）のＮＨＫスペシャル「超・進化論（１）植物からのメッセージ～地球を彩る驚異の世界～」を見た。植物をテーマにした番組で農家でも知らないことが多く、植物の生態が美しく描かれドラマ仕立てでわかりやすく楽しく勉強することができた。

○　１１月１１日（金）のかんさい熱視線「ボクは小４農家ゆうちゃん～米作り　６か月の奮闘記～」を見た。単純にお米が大好きな小学生がお米を作って食べることをドキュメンタリーにしていたが、子役がナレーションをしており、絵日記のような形で番組が作られていておもしろかった。ゆうちゃんという男の子が親と地域の人と一緒に取り組みながら、いろいろなことを経験しながら成長していく姿に心が温かくなった。

（ＮＨＫ側）

「ほっと関西」でも定期的に取り上げたものを番組としてまとめ、最後の収穫までを盛り込んだもので、収穫したお米を食べているおいしそうな表情が秀逸だったと思う。地域のみなさまに協力していただきながら制作した番組であり、今後全国向けにも放送する予定となっている。

○　新型コロナウイルスに関する報道について、ＮＨＫに限ったことではないが、これ以上世間をあおらないでほしい。感染者数だけでなく致死率など過去の波と比較してどうなっているのか、インフルエンザとも比較しながら報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

一足先に寒くなっている北海道で感染者数が増加していることから、近畿地方でも冬に向けて増えてくると想定している。医療現場の状況、重症化リスクや致死率についても注視していきたい。特に重症化リスクのある方には感染者数の推移が予防に役立つ情報でもあり、まずは取材をしっかりして、これからの季節に向けて報道していく。

○　１１月７日（月）のスイッチインタビュー「養老孟司×太刀川英輔　ＥＰ１」を見たがとてもおもしろかった。解剖学者と工業デザイナーということで、ともに「形」を考える学問だが、解剖とデザインは同じ脳の使い方をしているのかもしれないと勉強になった。

○　「趣味の園芸」を見た。長年放送されているがとても分かりやすく、一般家庭の方が農業に興味を持てる内容だ。“趣味の”とタイトルについていることはとても大事で、そこに焦点を当てた番組は意義があると思う。趣味番組だけでなくより園芸を専門的に扱う番組も見てみたい。

○　１１月８日（火）のハートネットＴＶ「私はここにいる～中高年　性的マイノリティーはいま～」を見た。番組は大阪府守口市で性的マイノリティーの活動を支えるために寺の住職となった方の話だった。中高年は自分が同性愛者や性的マイノリティーと伝えられない人も多く、法的に婚姻が認められていないため養子縁組で親子関係になったことや、トランスジェンダーの人を介護するのは男性か女性どちらなのかなど現実に起きている問題を教えてくれた。実際に今子どもたちに、指針を示さないといけない段階にいる親もいる。このようなテーマをもっと取り上げて、当事者の声を拾ってほしい。

（ＮＨＫ側）

中高年のＬＧＢＴＱについては、２年目のディレクターが担当し、最初は５分間のニュース企画で取材をした。継続して伝えていく必要があるテーマなので、今までの取材をまとめて番組として制作したが、今後も引き続きこのテーマに取り組んでいきたい。

○　ＮＨＫは最近、教育番組のネット配信に力を入れていると感じており、コロナ禍では子どもが番組をインターネットでたくさん見ていた。ＮＨＫの予算削減の話が出ているが、そういう取り組みは今後も引き続き注力してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

教育番組はインターネットとの親和性が高いコンテンツだと感じている。「NHK for School」はこれまで学校での視聴を考えていたが、ここ数年家庭でも見ていただけるように内容の充実を図ってきた。今年の４月から「ＮＨＫラーニング」というサービスを開始し、学生だけでなく一生涯学べるコンテンツを集めた。まだ開始したばかりだが多くの人に利用していただきたい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、連続テレビ小説「舞いあがれ！」第１週を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜連続テレビ小説「舞いあがれ！」第１週
（１０月３日（月）～７日（金）総合　前８：００～８：１５）について＞

○　コマ撮りアニメーションで制作されたオープニング映像からはＣＧには無いぬくもりがあり、毎日見ても飽きないと感じた。第１週では幼少期の主人公を描いているが、子役のちょっとした目のしぐさや目で何かを語りかけるような演技がすばらしかった。周りを固める役者も有名な人が多いが、驚いたのは女性お笑い芸人の方が隣の家の母親役で出演していたことで、とても自然な演技をされていてよかった。家を出ていった娘と母親が久しぶりに向き合って会話をするシーンの後ろで柱時計の振り子の音が静かに鳴っていたのが緊張感や微妙な感情の揺れを演出しており印象的だった。主人公が体調をくずして学校に行けない状況から、親が五島列島に連れて行くという流れに違和感があるものの今後のストーリーにどうつながっていくのか期待している。

○　連続テレビ小説の主人公は明るい作品が多い印象があるが、今回は体が弱く控え目な主人公ということが意外だった。これからも少しずつ成長していく過程を期待している。

○　女性の脚本家がパイロットを目指す女性主人公を描くという、女性の多方面での活躍や社会参画を促すエンパワーメントとなるドラマであると感じている。昔のテレビドラマの印象では頑固であったり家庭のことを顧みなかったりという父親像になりがちだが、今作においては妻の悩みについても、子どもの夢に対しても理解があり理想的な家族像を描いていて大変感慨深い。こうしたドラマを通じて家庭を考える父親が現実にも増えることを願っている。

○　朝の「連続テレビ小説」はもはや日本の文化ともいえる存在であり、今後も継続して制作してほしい。誰もが覚えている平成という時代を扱うことによる時代考証の苦労を飛行機や生活の描写から感じている。今回の脚本はナレーションによる状況説明が少ないが、さまざまな描写がされていて状況が伝わりやすいと思う。配役は有名な俳優を起用していることもあり、さすがの演技だと思いつつ、大阪ことばも含めどこまで関西の雰囲気を出すかのあんばいも難しいと感じた。五島列島でずっと鳥の声が聞こえていたことや、町中を走る車の効果音が気になったので、もう少し抑えた音にしてもよいと思った。

○　パイロットを目指し、空を見上げて飛ぶことをあきらめないというテーマはすばらしく毎日楽しみにしている。主役を演じる俳優にも、話の組み立てにも安心感があり、見たあとに純粋に子どもの夢を応援しようという気持ちになる。２話の時に、北朝鮮のミサイル発射があった影響で番組が休止となったことに驚いたが、次の日に２話連続で放送があり視聴者に配慮をしていてうれしかった。

○　母親を演じる俳優の演技がすばらしく、大阪ことばも使いこなしており、工場での仕事や病気の娘の看病で疲弊している様子や、五島列島から帰るときの葛藤などもわかりやすく、母親としての愛情をうまく表現していると感じた。主人公を演じる子役も、控えめな感じが表現されており、祖母の様子をおそるおそる伺っているところや、一方で五島列島の学校での校外学習では屈託なく笑っているところがうまく演じられていた。随所に五島列島の自然のすばらしさも映っており、地方の振

興の要素もあるドラマとして役割を果たしていると思った。父親が経営しているねじ工場の、この先の苦労や新たな技術開発についても注目していきたい。

○　細部までこだわって制作していることが伝わってくるよいドラマだ。話の展開もテンポがよく、物語冒頭の飛行機内で主人公が女性機長としてアナウンスをする演出はとても斬新でおもしろかった。演じる俳優がすばらしく、役者の個性、人間味がにじみ出ていると感じた。今の時代において連続テレビ小説が果たしている役割や使命は昔のそれとは大きく変わってきており、誰をターゲットに何をメッセージとして制作しているのか、特に前作では疑問に感じていた。今回はクオリティーも高く、今後の展開を楽しみにしている。北朝鮮のミサイル関連ニュースで翌日に２話連続で放送していたが、録画機の関係か後半が録画出来なかった。予定していた番組を短縮してまでこうした編成はしなくてもよいのではないか。

○　展開も読みやすく、わかりやすいストーリーなので安心して見続けられる番組だ。主人公の頑張っている姿を見ると、元気をもらえ１日の活力になっており、１５分間だからこそ毎日見続けられると思う。北朝鮮のミサイル発射の影響で放送予定が変更するということはしかたないと思うが、視聴者の朝の習慣が崩れてしまうので残念だった。

○　連続テレビ小説には悪い人は出てこないのが通例だと感じており、今回の登場人物は個性的でありながらも優しく、見ていて嫌な気持ちにならない。オープニングのアニメーションで紙飛行機が走ったり、たこになったり、水たまりに落ちて泥まみれになったり、それでも立ち上がり最後に鳥になって島に飛んでいく様子は舞の成長を表していると感じた。主題歌も映像と合っていてさわやかなドラマにちょうどよいと思う。

○　主人公を演じる子役は愛らしく、子役時代が描かれていると小さい子どもなども引きつけられると思う。キーワードが平成という時代や、家族や地方のぬくもりである作品だと感じた。祖母役の俳優の演技もすばらしく、母親の過保護や過干渉に対する祖母の考え方という視点を表現しており、核家族化が進み、多様な価値観が失われつつある現代に通じる社会的な課題をうまく取り上げていた。東大阪も五島列島どちらにおいても、地方の豊かさや美しさもしっかりと表現されており非常によい番組だ。

（ＮＨＫ側）

物語と時代背景の整合性をとることは非常に苦労しており、今回のドラマで言うと主人公と父親が一緒に見ていた飛行機はその時代にあるものでなくてはならず撮影にも苦労した。当時の時代をリアルに感じられるよう検討しながら制作している。リアリティを感じるのは“音”であるため、作中の効果音についてもＮＨＫのこれまでの蓄積を生かして制作している。

（ＮＨＫ側）

平成から始まる現代劇ということで、みなさまの今までの生活に根ざした風景や、家族や主人公に関わる人たちを、共感していただけるような形で大事に描いていきたい。少しでも多くの方に見ていただき、明るい希望をもって１日を過ごしてもらえるような番組にしていきたいと思い、制作を進めている。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１６日（日）の明日をまもるナビ「防災の知恵　あなたの質問に答えます」を見た。単なる、防災用品や災害時の食材の調理方法の紹介番組になっているように感じた。もうすこし内容を考慮して制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとしては災害が起きた時に報道するのはもちろんだが、いざというときに備えてほしいという思いがあり、さまざまな手法でアプローチをしている。いただいた意見は制作現場に伝えたい。

○　「めっちゃ関西　秋の１ｃｈ感謝祭」（総合　14 日(金)前 10：05～15 日(土)後 6:59)を見た。メインキャスターを務めていた武田アナウンサーはＮＨＫを代表するような全国区の有名なアナウンサーで、今までは真面目な印象があったが、この番組では優しい人柄も伝わり和やかな雰囲気で見やすかった。

○　「めっちゃ関西　秋の１ｃｈ感謝祭」ではオープニングで、番組のラインナップが説明されており、バラエティーに富んだ番組が大阪局で制作されていること

に驚いた。関西に住んでいながらも、大阪局でどの番組を制作しているか知る機会があまりないので意義のある編成だったと思う。今後は大阪局のアトリウムを活用し、イベントも同時に開催できればより多くの人が楽しむことができ、ＮＨＫにより親しみも持ってもらえると思う。

○　一般の視聴者からすると大阪と東京のどちらで制作したとしてもあまり関係がないので、この編成の感じ方にギャップがあるのではないかと思う。

○　１０月１７日(月)のファミリーヒストリー「西川貴教～エンターテイナーの原点　故郷への思いを引き継ぐ」を見た。滋賀県内のホテルなどに番組のポスターが貼ってあり、ＳＮＳでも話題になっていて、西川さんは本当に滋賀県で愛されていると感じた。主催の音楽フェスは毎年草津市で地元の人たちや行政と深く関わりながら開催されているが、その理由が番組を見てよくわかった。

（ＮＨＫ側）

本部で制作が始まった段階から大津局と連携をとり、事前に地域のみなさまにお知らせした。ほかの放送回では、その地域のみなさまとファンミーティングも行っている。

○　１０月１８日（火）のクローズアップ現代「“老いるマンション”老朽化と高齢化にどう備えるか　解決策は」を見た。昔は賃貸マンションから、分譲マンション、そして戸建てに住むという流れが主流だったと思うが、現代はマンションが終の住みかとなることが多い。高度経済成長期に建設されたマンションが４０年から５０年ほどたっていて、管理組合すらないことが多いことに驚いた。マンションだけでなく居住者も高齢化していっており、修繕積立金も年金から払わないといけないため金額を上げることもできず、建物が朽ちるのを待つだけという状況をみて不安に感じた。短い番組ではあったが、今後とも継続して取材してもらいたい。

○　１０月１８日（火）のいいいじゅー！！「三重・志摩市」を見た。女性の看護師が三重県に移住して、趣味のマグロ釣りを配偶者と一緒に楽しんでいたが、リモートワークやワークライフバランスに配慮した病院経営といったさまざまな現代社会の重要な要素が含まれていたと感じた。移住というテーマで色んな地域を取り

上げているようだが、こういう番組は地域の活性化という意味でよいと思う。

○　「ニュースＬＩＶＥゆう５時」を見た。番組内でＡＩのナレーションが入っている箇所があり、おもしろい試みだと感じたので、そういうチャレンジは今後も続けて欲しい。

○　「第７７回国民体育大会～いちご一会とちぎ国体～陸上」(E テレ　6 日(木)後 3:00～3:59、サブ ch　後 3:59～4:40、7 日(金)後 3:00～3:59、サブ ch 後 3:59～5:18、BS1 8 日(土) 後 2:00～4:20)を見た。Ｅテレでは放送時間が短く、注目される種目だけを中継していたと思うが、それ以外の種目もインターネットのライブ配信などで見られればよいと思う。権利の問題もあるがスポーツは生放送でみることに価値があり、緊張感や試合展開がリアルに伝わると思う。

（ＮＨＫ側）

スポーツ中継は権利関係など難しいところがあるが、いただいた意見は制作現場へ伝える。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議ではまず、「２０２２年度後半期の国内放送番組の編成」についてそれぞれ説明があり、「２０２３年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。続いて、事前に視聴してもらった、ドキュメンタリー 夏「あなただけの靴を探して Walk in Your Shoes」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜ドキュメンタリー　夏「あなただけの靴を探して　Walk in Your Shoes」
（総合　８月１６日（火）後７：３０～７：５７）について＞

○　ドキュメンタリー番組でありながら、よい意味で映像が映画やコマーシャルのようで、さわやかな印象を受けた。７０代の女性が完成した靴を受け取る時に、靴ずれはしかたないと満足はしてなさそうな様子だったことが残念だった。足にまったく負担のない靴というのは難しいとは思うが、もう少し前向きな感想が引き出せたらよかったと思う。ピーマンを洗っているところや釘が落ちるところなど印象的にスロー映像が入っていたがどのような意図があるのか気になった。

○　“整形靴”ということばはあまり認知されていないと思うが、番組を通じて整形靴のことや、それを作る仕事など世の中に知ってもらえるきっかけになったと思う。靴職人に焦点を当てたすばらしい番組だったが、整形靴を製造するメーカーの取り組みや靴への思いにも興味が湧いた。

○　スローモーションで映し出されたピーマンや釘などの映像、ものの隙間から捉えた職人の作業風景がほかのドキュメンタリー番組との違いを演出していた。１足の靴を作るのに注文を受けてから半年もかかることに驚いた。足に変形や麻痺がある人が痛みなく履ける靴があることで外出しようという意欲が湧き、行動範囲を広げ、前向きに生きていくことにもつながると思った。いつもの癖なのか、撮影があったからなのかがわからないが職人が独り言をしゃべる場面が多かったことが気になった。

○　足に病気や障害があっても履きやすい靴を、時間をかけて工夫しながら製作している姿に感銘を受けた。靴製作は一人ひとり足の形状が違うので難しそうだが、製作者の思いやりが感じられ、お客様も自分のために作られることを喜んでいたのがとても印象的だった。整形靴が完成するまでの半年の間に足の状況が変化する場合もあるが、その際に整形外科医に医学的なアドバイスを受けているのか気になった。また、前職での経験や知見がどのように生かされているのか、個人で製作する場合と企業として製作する場合の何が違うのかも知りたくなった。

○　主人公の職人は勤めていた会社から独立して現在の工房を構えたということだが、マイノリティーの方に寄り添う仕事を選んだ動機やきっかけ、なぜ義肢装具に関心をもったのかというところが掘り下げられていないと感じた。映像と演出もアニメや映画のように感じ、若年層に受け入れられることを狙ったのか、そのようなカメラワークにした意図が知りたいと感じた。

○　とにかく歩きたいという人の思いが伝わり、涙が止まらなかった。整形靴を求めている人がいるということにも、またそれを仕事にしている人がいることにも驚き、この番組を制作してくれたことに感謝の気持ちでいっぱいだ。最後に靴を受け取った７０代の女性が、あまり満足そうではなかったところは残念に感じたので、順番を変えるなど構成をより工夫してもよいと思う。３０代の男性が言っていた、靴の

音や見た目が気になるということをかなえてあげたいと思っていることに感動した。最後にその男性が注文した靴をはいて「ライブに行きたい」と言っていたことに、客の満足度が表されていたと思う。

○　機能だけでなく、デザイン面でも利用者を喜ばせるすばらしい仕事だと思った。歩行の補助機能があるだけの味気ない靴ではなく、見た目もおしゃれで外出する気持ちも促進させられるので、肉体的にも精神的にも効果的だと感じた。職人の方が試行錯誤を繰り返しても靴による痛みが取り除くことができないつらい心境を吐露していたことが、生々しく印象に残った。

○　骨太で質が高く、みずからの職業に誇りを持って課題に取り組んでいる職人の意識の高さに感銘を受け、これから巣立つ若者にぜひ見てもらいたい番組だった。映画のような映像ときれいなカメラワークに、ナレーションも味わいがあり、見終わった後心が温かくなった。ただ、タイトルを聞いただけでは見なかったと思うので、人が興味を持てるようなタイトルにするよう工夫した方がよいと感じた。

○　とにかくきれいな番組だった。音楽もとてもよく、ピアノの音色も存在感があるが内容の邪魔をせずさわやかに番組を演出しており、インタビューと靴を製作している映像をうまく組み合わせていてよかった。歩きたいと思っている人を歩かせるためにその人にあった靴を作るという福祉的な要素や、整形靴の認知の拡大、半年間かかって靴を作り上げる職人技などさまざまなメッセージが伝わってきた。

○　ＳＤＧｓの視点においても、地域の人を取り上げるという視点においてもとてもよい番組だった。デザインと実用を兼ね備えた靴づくりのための試行錯誤の過程が丁寧に取材されており、出演者の笑顔も印象的で全編に感じられるぬくもりも魅力だった。今回は神戸局の制作だったが、各局からこういった地域で頑張る人を取り上げた番組を発信してほしい。

○　オンリーワンの靴のために奮闘する姿に感銘を受けた。注文した客が、しっかり痛みや気になるところを言えるような雰囲気を職人の方が作り出しているところがすばらしかった。完成したものに対して指摘することは難しいことだが、このような部分も番組にすることで整形靴や義足を利用している方が、自分の思いを言いやすい環境になる可能性があると感じた。

（ＮＨＫ側）

番組を担当したのは入局２年目の若いディレクターで、パラリンピックが終わった昨年の秋から半年間取材を続けた。履くだけでなく周りの人もうれしくなるような靴づくりをしていくことが主人公の信条であり、そのことばどおり映像の中の家族や友人が笑顔になっていくところが印象に残ったのではないか。内容や表現に至らない部分もあるが、取材対象者をやわらかな視線で見つめた番組に仕上がったと思っている。

（ＮＨＫ側）

足が不自由な方のための靴を取り上げているが、職人の取り組みや、利用者が抱えている気持ちに普遍的なメッセージがあると考えており、ひたむきに向き合う姿勢を伝えることを狙いとして制作した。７０代の女性が完成した靴に満足しなかったことは、編集していくうえでも非常に悩んだが、等身大のドキュメンタリーとして、そこは素直に伝えることにした。出演された方のインタビューや生の声を重視しており、ナレーションは最小限に抑えた。印象的な映像にしたいと考え一部ハイスピードカメラを使用し、スローモーションなど映像の質感も工夫して視聴者を飽きさせないようにした。

＜放送番組一般について＞

○　ＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について、この人なら絶対に大丈夫だという人にしか取材しないようであれば、声なき声や小さい声に耳を傾けることはできない。ルールで締め付けることで取材や制作体制が委縮しすぎないようにしてほしい。取材の基本は人と人との関係性だと思うので、基本を大事にしてほしい。

○　７月２７日(水)の歴史探偵「岡本太郎と太陽の塔」を見た。太陽の塔はテーマ館の屋根を突き抜けているという非常にインパクトがある建造物で、今でもあの

ようなものはなかなか見ることがない。岡本太郎の爆発的な発想に対して、周囲の人もそれを没にせずに受け止め、芸術家と建築家の情熱による独特な構造物が生まれたことに感銘を受けた。

○　８月６日(土)に放送したＨＹＯＧＯ＋「“美の巨匠”神戸に集結　アートの世界よければどうぞ」（総合 後 11:30～12:00 兵庫県域）では、有名な絵画を真面目な解釈だけではなく、見る人それぞれの解釈や思いで鑑賞する視点が紹介されていた。大喜利などさまざまなコーナーがあり、「日曜美術館」などとは全く違った美術系の番組でおもしろく見た。

○　９月９日(金)の新・にっぽんの芸能「能装束で堪能！幽玄なる美の世界」を見た。古典芸能の魅力を紹介しており、特に装束の魅力に注目するという独自の視点がすばらしかった。演目の「屋島」では舞装束を際立たせるためにシテの片山九郎右衛門さんが一人で演じていたが、バックに流れる地謡の演奏とシテの所作とが見事に合っており工夫して収録していると感じた。

○　さまざまな織物が紹介され、能楽者の方が装束の奥深さをわかりやすく解説をしていてよかった。ＮＨＫにしか作れない番組であり、情報としても風化しないので、将来的にも非常に重要な財産となると思う。

○　９月１６日(金)の「ほっと関西」を見た。通園バスに置き去りにされた結果子どもが亡くなった事件に関連して、大阪府内の全自治体に子どもがバスに取り残されたケースを取材し、５件あったと報道していた。経緯だけでなくこういう事件は実際に起きる可能性があるということを伝えてほしい。事件が一段落したら背景や、どうしたら解決できるかということも伝えてほしい。

　７月１９日(火)～３０日(土)のＴＡＲＯＭＡＮ岡本太郎式特撮活劇（Ｅテレ 前0:30～0:35)を見た。サカナクションの山口一郎さんが出演していることもあり、高校生の息子から勧められて見たが家族全員で楽しんでいる。ＹｏｕＴｕｂｅのＮＨＫ公式チャンネルでも配信されており子どもや子育て中の母親にも受け入れられていると聞く。ＮＨＫが狙いとしている若年層の視聴者に届いているのではないか。

○　９月１日(木)の巨大魚＆幻の魚を追え！「ナニワの生命大調査ＳＰ」（総合 後

7:30～8:42 近畿ブロック)を見た。深海魚バラムツは静岡県の沼津あたりが有名だと思っていたが、和歌山県でも釣れることは知らなかったので勉強になった。自然が相手の番組なので、結果的に魚が釣れなかった場合にどうするのかが気になった。

○　台風関連の報道について、年々、量が増えすぎているように感じており、身を守ることは大事だが毎回同じことを言っていると思われないように伝え方の加減は必要だと思う。阪神・淡路大震災の報道でも言われているが、被災地の内と外で必要な情報は違うので、避難の呼びかけなのか、防災なのか、支援を求める情報なのか細分化した報道をしてほしい。

○　災害報道については危機感を伝える加減に苦労しているのではないかと感じている。ＮＨＫの報道の在り方というよりは気象庁が、「かつて経験したことがないような暴風、記録的大雨のおそれ」となる台風としており、視聴者には感覚がつかみきれず過剰な表現と受け止められてしまっているのではないか。自然災害は年々規模が大きくなってきているため難しいと思うが、災害報道をどう適切に伝えていくか今後も検討が必要だと思う。同時に武力攻撃などの有事の際の報道のあり方についても、どこかで考えておいてもらいたい。大阪府でも有事の際にどう府民を守るのかについて保護計画を策定した際に、報道との連携もあったと思うので、災害時の適切な報道の仕方について、常に幅広く考えておいてほしい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、歴史探偵「ＶＲ探検！秀吉の大坂城」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜歴史探偵「ＶＲ探検！秀吉の大坂城」
（６月２９日（水）後１０：００～１０：４５）について＞

○　秀吉が造った大坂城をＣＧ技術でＶＲ(仮想現実)映像にして再現していたが、そのＶＲ映像の中に出演者を合成しており、実際に体験しているような感覚でおもしろく、歴史に詳しくない人でも楽しめた。ＶＲから発展してメタバースのような仮想空間が作られてもおもしろいと思う。秀吉時代の石垣が発見されていたが、今の大坂城と異なり加工された石ではなく自然石を使った野面積みということも興味深かった。大坂城は江戸幕府が造ったものを再建しているとのことだったが、なぜ秀吉時代の城が再建できなかったのかも知りたくなった。

○　ふだん歴史の勉強で習う切り口にとどまらず、科学的に分析したり、当時の状況を細かく再現したりするような、歴史に興味がなくても楽しめる番組だと感じた。秀吉の大坂城の石垣が地下に眠っていることや、滋賀県の竹生島に当時の建

築物の一部が使われていることなど、興味が湧くような内容でおもしろかった。一方、ＶＲは装着している本人は迫力を感じることができ、おもしろく感動的かもしれないが、視聴者にはその感覚が少し分からないところもあって残念だった。実際にＶＲが体験できる機会があればよいと思う。

○　ＶＲを体験している人の背景にＣＧ映像を合成していたことはおもしろい取り組みだったと思う。しかしＶＲを体験したことがない人など一般視聴者には感動を共有できなかった人が多かったかもしれない。例えば大阪局のアトリウムで実際に体験できる機会などがあればより楽しめると感じた。テレビ番組として、テレビの画面上で臨場感を表現していくとよいと思う。

○　大坂城の地下にある、ふだんは見ることができない秀吉時代の野面積みの石垣を映像で見ることができ驚いた。ＶＲ技術を用いることで、これまで研究してきたことを再現することができ、大変有意義だということが分かった。新しい技術を用いることで、歴史の理解を今まで以上に深めることができるということを見られたことはよかった。

○　今までのＶＲを使った多くの番組は、ＶＲ装置を装着している人の視界を映していただけで、視聴者としては激しく揺れる映像を見させられ没入感も得られないという問題があったが、今回は実際にＶＲ空間にいるかのような映像で、テレビにおけるＶＲの新しい見せ方として一定の価値があったと思う。一方で城壁などは、素材感が均一すぎてＣＧ映像であることが明らかに感じられたので、リアリティーや没入感を増す工夫がもう少しほしかった。

○　今回はＶＲを体験している人の目線を通じて、視聴者が疑似的に体験する番組だったが、すべてＣＧ映像の方が見やすかったと思う。かなりの労力や時間をかけて開発したと思うので、一般の人に公開をして体験できるようにしたほうがよいと感じた。ＶＲは技術的に発展途上だとはいえ文字や二次元的に得られる情報とは違ったものがあり、見ている人が作品の世界に入り込むといった全く新しい可能性を持ったコンテンツに発展していくと感じた。

○　大坂城をＶＲにより再現することで今までとは違った視点で、秀吉の権力、天下を治めるための秘けつが分かるような構成になっており楽しく見た。ＶＲ映像を実

際にどこかで見られるのかと気になっただけに体験ができる場所や機会があればよいと思った。

○　映像技術も新しく興味深かったが、再現のためにこれだけの資料を集めたということに感服した。資料をもとに、研究成果を最新の映像技術をもって再現し体感できるように制作したことが、これからの新しい歴史の感じ方、学び方を示していると感じた。以前、所長のキャラクターが描き切れていないのではないかと言ったが、今回は出演者の調和が取れており、それが違和感なく番組を見られた一つの要因だったと思う。ＮＨＫにしか制作できない番組だと思うので、今後も期待している。

○　歴史を体感できるというＶＲの魅力を伝えていたと思う。現存する当時の石垣や宝厳寺の唐門、発掘された屋根瓦、絵画や文献などの史料をもとに分析する歴史研究の過程が丁寧に説明されていたことがよかった。壮大なプロジェクトだけに、今回のＶＲの制作がどのように始まったのか、どこまでＮＨＫが関わったのかも知りたいと思った。

○　ＶＲ映像だけだと全容が見えづらいという点が見事にクリアされており、実際の人物と合成された映像がすばらしかった。ＶＲを通して見ることで単なる想像から体験へと変わり、まさに当時の人の目線で歩けることがすごいと感じた。番組後半の真田丸の検証もおもしろかったが、大阪城のＶＲだけでも一つの番組として成立したと思う。

○　ＶＲ空間で立体的に当時の環境を体験できる工夫がされていて興味深く、歴史学の進展にも重要な番組であったと思う。金の使い方を鎌倉・室町時代の建築やほかの武家文化の美意識と比較したり、天守閣の虎など動物の持つ象徴的な意味を掘り下げたりすることで、また別の番組もできそうであると感じた。番組の後半で真田丸の優秀さが取り上げられていたが、結果的に大坂城が落城したので若干疑問を感じ、もう少し説明がほしかった。

（ＮＨＫ側）

以前放送した「大坂の陣 幻の大洪水」を制作する際に、江戸時代が始まるまでの大坂城周辺の地図を、センチ単位で精密に描き出したＣＧデータを作成しており、その上に建物を載せてみるというところから企画が立ち上がった。番組は過去の資料や映像を継続的に利用しているため、必ずしも番組単体で費用や労力を推し量れないところがある。今回制作したＶＲ映像をさまざまな形で提供したいという計画はあったが、新型コロナウイルスの影響もあり中断している。引き続き、放送で使うだけではなく広く社会に還元していくことを課題として考えていきたい。

（ＮＨＫ側）

ＶＲ空間に再現したＣＧは番組にも出演された先生に監修していただきながら制作した。大坂城の番組だけで今までに１０本以上制作をしており、今までの財産を有効活用していった。関わった人数も多く、ＣＧの制作についてもさまざまな会社に協力いただいたプロジェクトとなった。今回は初めてＣＧの映像に、出演者をリアルタイムで合成させたが、視聴者にどのようにバーチャルの映像を感じてもらうのかは課題であり、今後も検討していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１０日（金）の「ニュースきん５時」を見た。中高年に人気のバレエ教室の話は、熱中している世代が趣味や生きがいについてどのように考えているのかを垣間見ることができた。車いす利用者向けのスカートを制作する取り組みはすばらしく、それに対するゲストのコメントも専門的な知見と自分の意見が入っていてよかった。ことし花火大会を開催するところが全体の３分の２もあるというニュースがあったが、このような明るく前向きな話題を今後も届けてほしい。番組のホームページを見たが、過去の放送回のサムネイルと内容が同じものが並んでいたので、もう少し工夫が必要だと思う。

○　昨年「ニュースきん５時」が始まったときには緊張している雰囲気が感じられたが、一年以上たちかなりこなれてきたと感じた。「ＩＰＰＯＵ」のコーナーの中高年向けのバレエ教室については、個人的にも何か新しいことを始めたいと思わ

され、楽しい気持ちにさせてくれた。「全国放送されないけど自慢」のコーナーの徳島県と愛媛県の地域のあるあるネタは、ほかの地域の人は全く知らないことを音楽に乗せて紹介しており楽しく見た。さまざまなコーナーやニュースもありメリハリがあり飽きずに見ることができた。

○　報道なのか地域情報の発信なのか軸をどちらに置くのか迷いを感じたが、番組の趣旨や取り組み、試みはおもしろいと思った。なぜテレビ番組は東京の出来事をほとんどが東京から発信しているのかと疑問に思っている人も多いと思うので、大阪発のニュースはもっとあってもよい。背景のセットが凝りすぎていると感じており、関西の文化や地域をもっと表現したものでもよいと思う。

○　中高年に人気のバレエ教室は、単純に流行している事実だけでなく、オンラインで海外のレッスンを受講している人やコンクールで受賞した６０代の人のコメントも紹介していて、新型コロナウイルスの流行下でもできないことばかりではないというメッセージも伝わってきた。徳島県と愛媛県のあるあるネタを歌った替え歌も全県分聴いてみたいと思うくらいよかった。日本全国にさまざまな常識があり、いろんな見方や暮らしがあることを歌から感じられた。車いすファッションの話も、着ただけで胸を張れるという利用者のコメントから元気をもらえた。

○　金曜日の夕方５時から放送ということで、家事をしながら見るにもちょうどよい情報量だったと思う。中高年のバレエ教室の話も、この時間帯に在宅している層を意識したのではないかと感じた。スマートフォンを使ったバレエレッスンで、ユーザーの３０％は５０歳以上であると説明されており興味深かった。高齢者でもコロナ禍でテクノロジーを有効活用している人たちがいるという情報を幅広く発信したことは意義があると感じた。

○　ニュースとバラエティーが一体化した番組を目指していると感じたが、せっかく大阪発で全国に届けるということであれば、もう少しエッジの効いたものにしてもよいと思う。一方で、大阪発という色合いを出そうとすると、ゲストの人選や、選択されるトピックが限定的になってしまうと思うので、全国の視聴者が見てもおもしろいと思える番組を目指した方がよい。放送が始まってからそれほど時間もたっておらず、試行錯誤をしている段階だと思うので今後に期待している。

○　内容が盛りだくさんで視聴者が興味を持てるようなバラエティーに富んだ企画があり楽しく見た。特に中高年向けのバレエ教室は、生きがいとなっている感じが十分に伝わってきて、いくつになっても挑戦できる場所があるというメッセージを感じた。今回はバレエが取り上げられていたが、ほかの趣味や習い事もあると思うので、いろいろなチャレンジを取り上げると様々な人に共感してもらえるし、チャレンジするきっかけになると思う。

○　これから発展の余地のある新しい試みの番組であると思った。盛りだくさんの内容だったが、ニュースについては政治なのか経済なのかスポーツなのか、まとまりのない印象を受けた。東京も一つの地方として、日本全体が多様であるということを見せる番組にしていったほうが、もっと新しい日本の方向性を示せるような番組になると思う。

○　中高年のバレエ人気は、いくつになっても成長できるというメッセージを伝えていたよいコーナーだった。アナウンサーの自身の体験を基にした話や、ゲストの年齢は背番号だということば、ファッションは未来を見るものといったコメントもよかった。全体を通して慌ただしい感じがあり、番組の紹介にあるように肩の力を抜いて見られるような、進化したこの番組を見てみたい。

○　６月１０日（金）の「ニュースきん５時」を見た。ニュース番組でありながら文化的な話題から始まり、番組冒頭で視聴者の注意をひきやすくなっていると感じた。「ＩＰＰＯＵ」のバレエ教室の内容と、映像を受けてのスタジオのコメントに励まされた。「全国放送されないけど自慢」の替え歌は、それぞれの県のネタは個性があるが、視聴者はしらけてしまうと感じた。ほかのニュース番組に比べると親しみやすく、さまざまな場所で活躍する人にスポットを当てた番組に感じた。

○　全国各地の多くの話題から学びを得たり楽しめるニュース番組であり、ただ興味深いだけではなく、社会的意義もある話題も取り上げられていた。アナウンサー自身の経験からくる実感のこもった説得力あるコメントや、ゲストのコメントも、前向きで心温まるもので好感を持った。中高年のバレエ教室については、人生の晩年という表現を６０代くらいの人に用いることには違和感があった。車いすに乗ったまま着脱できるファッションは、便利である一方で、障がいの度合いにも

よるが、洋服の着脱とともに車いすから座る、立つという動作をすることもリハビリにつながるので、そうした点に関するコメントも一言あればよかったと思った。

（ＮＨＫ側）

中高年向けのバレエ教室を担当したのはドラマ制作が専門の者で、エンターテインメント的な話題から、社会的な問題を抽出していくことに挑戦した。多様なジャンルを専門とするディレクターが、取材で得たものをそれぞれの番組制作に生かすといった取り組みを進めていきたい。

（ＮＨＫ側）

番組が放送している時間帯からも、４０代や５０代の在宅している方をターゲットとしているが、家事の忙しい時間でもあるため、少しでも目にとまる工夫や、話題の選定を常に考えている。また、大阪から放送する意味についても、東京から放送することとの違いを考えながら、毎回試行錯誤を続けている。

○　７月８日（金）に起こった安倍元首相銃撃事件について民放含め伝えていたが、安倍元首相の自宅前から中継しており、ルールとしてはよいのかもしれないがモラルとしてはどうなのかと気になった。ＮＨＫから率先してプライベートに立ち入った放送をやめていってもよいと思う。

○　安倍元首相銃撃事件のニュースは恐らく東京からの発信だったと思うが、地理的にも大阪のほうが近いので、そういうときこそ関西発のニュースで発信したほうがよいと思った。災害などの有事の際は東京の代替機能を大阪が担うというＢＣＰの話も以前聞いたが、突発の事件に対して大阪局が主体となれる体制ができているかが気になった。

○　事件発生直後についてはしかたがないと思うが、高校生にインタビューしている映像が頻繁に流れており、子どもを持つ親としては人が銃撃された現場からのコメントを高校生から聞かないといけないのか、せめて大人からコメントをもらったほうがよいと感じた。

○　関西地域に密着した報道として、奈良県を含む近畿各地域の警察や警察の広域連携が抱える課題も深く掘り下げた検証番組が制作されることを期待している。現場で奈良局の記者が、身の危険を感じながらも懸命に報道されている姿が印象的だった。今後は不測の事態に備えて現場の記者にも防弾チョッキなどが必要な時代になるかもしれないと感じた。

（ＮＨＫ側）

今回の事件は極めて重大な事件で、選挙取材中の記者も現場にいたということもあり、すぐに速報を始めた。大阪局を含め近畿の各局からも、記者やカメラマン、ディレクターなどの要員を現場に配置して、しっかりと取材できる体制を取った。高校生のインタビューについては、冷静に一部始終を見ていた非常に貴重な証言として、本人の承諾を取ったうえで当初使用したが、未成年のため早い段階でその後の使用を見合わせることにした。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では事前に視聴してもらった、Ｄｅａｒにっぽん「笑顔咲かせる　母の鼓動」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜Ｄｅａｒにっぽん「笑顔咲かせる　母の鼓動」
（５月２１日（土）前１０：０５～１０：３０）について＞

○　取り上げているテーマ自体が興味深く心に響いた。番組の中で、何人もの方を丁寧に取材しており、子どもの病気や障害と初めて対峙したときの心境や、そこから前向きな気持ちに変化していく様子が伝わってきてよかった。それぞれの母親の話だけではなく、横のつながりや支え合いが描かれていたこともよかったと思う。障害がある子どもをもつ母親たちが７年前に結成したという和太鼓グループの設立の経緯や和太鼓を選んだ理由も詳しく知りたかった。

○　繊細なテーマなので伝え方が難しかったと思うが、内容がまとまっておりよかった。番組を見て障害がある子どもの母親たちへの理解が広がればよいと思った。和太鼓の練習場所も映っていたので、番組で興味を持った同じ境遇の人たち

が和太鼓を始めてみるきっかけになればよいと思う。

○　障害がある子どもが生まれること、元気に生まれたのに突然病魔に襲われるということは、親にとってはつらいことだと思うが、明るく前向きに少しでも希望の光を見いだして前に進んでいく母親の姿に心打たれた。笑顔になるまでにはつらいことがたくさんあり、これからも乗り越えていくべきさまざまなことがあると思うが、それをはねのけるように何かに打ち込む母の姿は、子どもにとっても必ずよい影響があると思う。番組最後の、障害がある子どもが体育の授業で、先生の助けを借りながらなんとか前に進んでいく姿は、前を向いて進む母親の姿にも重なった。

○　和太鼓は男性がやるものというイメージが強いにもかかわらず、今回は障害がある子どもの母親たちの生きる力や、勇気づけにもつながっていることに焦点を当てたのがすばらしかった。和太鼓の練習風景とともに、障害がある子どもの食事の世話など日常の介護の様子が映し出され、余暇活動と介護を両立させる大変さを現実として描いていたことが、誰一人取り残さない社会を目指すというメッセージとして感じられとてもよかった。日本の芸能は神にささげる神事芸能に起源があると言われているが、和太鼓の鼓動が胎内にいる子どもの心臓の音と重なることや、母親の心を救う手段にもなるというところが、命や祈りにつながる芸能の原点を伝えていたと思う。

○　やさしい番組で見ていてうれしくなった。光が当たりにくい人たちに光を当てて、勇気をもってもらえるということがドキュメンタリー番組のよさだと思った。誠意を持って接し丁寧に取材しているからこそ、出演した母親たちの信頼を得て、心に届く番組を制作できたと思う。母親の中で、自分たちが何か悪いことをしたのではないかと自分を責めてしまうような発言が、震災で肉親を失った被災者のメンタリティーと重なる部分があり印象的だった。映像の撮り方、カット割り画面構成も工夫されており、好感が持てる作りとなっていた。ただ、母親たちの笑顔や悩んでいる表情がマスクで隠れていたことが残念で、撮影時に距離を取るなどマスクを着用しないですむ方法があったのではと思った。

○　和太鼓のグループが３年半ぶりに公演を行うことができたということで、新型コロナウイルスから抜け出す時期になってきたと感慨深かった。育児や介護、看護に

よって社会と断絶された気持ちになること、舞台用のヘアメイクや衣装で、お母さんという存在から抜けだしひとりの女性として輝く機会となること、子どものことは自分の責任だと感じてしまうことなどは、母親なら誰でも感じることだと思う。それらすべてを自分の人生と捉えて、グループ名の「ひまわりのやうに」前向きに私たちは生きていくというメッセージが伝わってきた。

○　社会から隔絶されてしまう可能性のある、障害がある子どもをもつ母親たちに焦点を当てていた。育児や介護等に忙殺されるとどうしても引きこもりがちになってしまうと思うが、和太鼓を通じて前向きに生きていく活力を発信していてよかった。３年半もコロナで公演ができなかったということだが、その間の葛藤やどのように乗り越えてきたのかも知りたかった。

○　障害がある人の家族の中では母親が一番責任を感じていると自身の経験から感じているが、そうした母親の本音やリアルを引き出していた。障害がある人が同じような境遇の人たちと情報を共有することは、その人自身や家族の励みになり、視野が広がって気持ちも明るくなり心が整理されると思う。グループとして母親たちが目標に向かって打ち込んでいくことは勇気や気力となっていると感じた。力強く生きていく母親たちの覚悟が描かれており、長い時間をかけて取材、制作されたＮＨＫならではのよい番組だった。

○　障害がある子どもの母親たちが苦労を超えて前向きに生きる姿に感動するものがあった。子どもをいつくしむ母親の気持ちというのは、恐らく時代に関わらない普遍的なものだと思う。番組コンセプトのとおり、新たな社会と生き方の可能性を、様々な人間模様の中で見つめていてさわやかな気持ちになった。今後も楽しみにしたい。

○　子どもを亡くした母親が立ち直る姿を前向きに描いていたが、それでもやはり子どもの病気というのはつらいことであり、重いテーマを前向きに描くのは本当に難しいことだと感じた。和太鼓グループ結成のきっかけ、活動の拠点、メンバーの出身なども番組で説明があればよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

担当したディレクターが粘り強く取材し、取材先と信頼関係が生まれたからこそ、母親たちの姿に密着して撮影することができたと思っている。

（ＮＨＫ側）

「Ｄｅａｒにっぽん」は今年度からの新番組で、変化と未来を見つめることを重要なテーマに掲げており、母親も子どもも自分の可能性を諦めてはいけないということが伝われば と思い制作した。担当ディレクターが日々の取材の中で、難病や障害がある子どもと、その家族を支援する団体の取り組みを２年程前に知り、そこから取材を重ね放送につながった。病気や障害がある子どもをもつ家族や母親は、苦労や過酷さに焦点を当てられることが多かったが、母親が輝き笑顔でいるということは、その子どもにとっても前向きな影響を与えていることが伝えられたと思う。

＜放送番組一般について＞

○　５月２６日（木）のおうみ発スペシャル「ザ・しがレガシー」（総合 後 7:33～8:00 滋賀県域）を見た。昔の映像を再編集するような番組はよくあるが、滋賀県の歴史的な出来事や重大事件などを扱うというよりも、当時の日常に着目して、端的でしかも思わず話したくなるような部分をうまく編集しておりとてもよかった。滋賀県に住む人々の県民性や人柄がよく表れた番組で滋賀県に愛着が湧いた。

○　滋賀県の昔の風景や、テレビがブラウン管だった時代の映像を現代の映像と比較して見ることができ、バラエティ番組として楽しく飽きずに見た。ただ、番組を収録した場所について説明がなく気になった。彦根城などもっと知名度がある場所の方がよかったと思う。

○　滋賀県民でなくても楽しめる、過去の映像をたくさん保存しているＮＨＫならではの番組だった。幽霊ホテルやびわ湖での湖水浴の映像、その時代に流行した歌謡曲のＢＧＭなどから、当時を思い出した人も多いと思う。ゲスト２人の軽妙な感じと少しおっとりしたコメントも、はしゃぎすぎずよい間合いで視聴者も一

緒に楽しめる番組だった。番組で放送された以外にも懐かしの映像があるとのことだったので、もっと見てみたいと思った。

○　地域から見た日本の歴史を振り返る意義のある番組だ。タイトルもしゃれがきいており、ユーモラスな演出もよかったと思う。自然環境や時代の状況が変わっている中でマラソン選手の雰囲気が今と変わっていないことにも驚き、変わることと変わらないことがあると感じた。男性のゲストが礼儀正しくネクタイを締めていたが、この番組の雰囲気からするともっとカジュアルな服装でもよかったと思う。

○　以前から過去の映像を有効に活用したほうがよいと思っており、番組としてとてもおもしろかった。テレビは今も家族の団らんの中心にあるものだと思うので、昔の映像が流れれば家族間のコミュニケーションのひとつになると思う。語り継がれなくなっている昔のことを、もう一度発掘して発信することを今後のコンテンツのあり方として期待している。

○　まさに秘蔵映像やお宝映像という言葉がぴったりの番組で、滋賀県のレガシーというよりは日本全体のレガシーとも言えると感じた。昔の映像からはかつての日本のよさを感じ、殺伐とした現在とは違いおおらかな時代であったことが伝わってきた。ゲストは滋賀県になじみのある方だったが、もう少し上の年代の人も含め３人でもよいと感じた。

○　懐かしさを感じる映像で楽しく見た。蛇の脱走事件の際におとりにしたネズミの出産などほんわかとした昭和の雰囲気を感じられる構成がよかった。この番組は大量の映像資料を保存しているＮＨＫだからこそ出来る番組で、大津放送局開局８０周年特番としてだけではなく、全国もしくは近畿地方各局の持ち回り企画にしてもよいのではと思う。

○　滋賀県のことをより詳しく知るきっかけとなり、こんなことがあったのだなと楽しく見た。番組で紹介された映像だけでなく、大津局ではより多くの過去映像が公開されていて見ることができるという情報は、実際に足を運ぶ人もいると思うのでよい視聴者サービスだと思った。ゲストが滋賀県で昭和５０年に行われた全国植樹祭について思い出を語った直後に、今年６月に行われ自身もナビゲー

ターをつとめる植樹祭のＰＲがあり、番組側から指示されているようにも見えた。

○　ＮＨＫの映像資産を生かした肩に力を入れずに見られる番組だった。ＢＧＭで当時流行した音楽が流れていたが、今の若年層は知らないと思うので、もう少し時の流れが理解できるような当時の社会全体の出来事を紹介したらなおよかったと思う。

○　地域に寄り添いつつ、番組アーカイブスの有効活用をしていてＮＨＫらしい番組だと感じた。今回は近現代の映像が中心でバラエティのような楽しい番組だったが、近江やびわ湖というのは日本のルーツでもあると思うので、古代や中世までひもといた教養の要素がある番組も見てみたいと思う。

（ＮＨＫ側）

大津放送局の開局８０周年を記念して、「おうみ発６３０」（総合 月曜～金曜 午後 6:30～6:59 滋賀県域）内で放送しているアーカイブス映像を活用した「ザ・しがレガシー」のコーナーを追加の取材を行って最新の情報を織り交ぜるなど、発展させて特別編として制作した。再放送した際には大津局の１階で視聴者のみなさまに大型ビジョンでも公開した。今後も地域に根ざして、滋賀県の歴史や文化を県内のみならず全国に発信していきたい。

（ＮＨＫ側）

この番組は、大津局からみなさまへの感謝の気持ちを、アーカイブス映像を活用する形で伝えたいと制作した。日本全体の出来事と滋賀県内の出来事を絡めて描くことも考えたが、番組時間を考慮し県内に絞った構成とした。ゲストの２人には思い出を好きに話してほしいと伝え、全国植樹祭の話も偶然に出たものだったが、指示されたように見えたとの指摘は今後に生かしていきたい。

○　神戸局の兵庫県警記者クラブの除名について、阪神・淡路大震災があった神戸でそういうことが起きたことは大変ショックだ。記者の人たちが丁寧に取材をすることがよい番組づくりにつながると思うので今回の件については残念に感じた。

（ＮＨＫ側）

兵庫県警記者クラブからＮＨＫが除名処分を受けた件については、一部の報道でご心配をおかけしていることをおわび申し上げたい。今回の件は知床半島遊覧船事故について、５月５日（木）の「おはよう日本」で全国向けのニュースと、北海道地方向けのニュースで放送したが、その内容に後に報道各社に配布された資料の内容が含まれていたことから、記者クラブの幹事社業務を怠ったなどとして除名処分を通告された。ＮＨＫとして対応を検討している最中であり、取材先とのやり取り、取材・制作の詳しい過程についてはお答えできないが、このニュースの取材において、兵庫県警記者クラブのクラブ員をはじめ、神戸局は、取材・制作、放送には一切関わっておらず、資料の入手の経緯にも関わっていない。取材先に向き合って丁寧に取材をすることは記者の基本であり、神戸局の記者もその基本を守って日々取材をしているが、今後も引き続き取り組んでいきたい。

○　６月９日（木）～１２日（日）の「陸上 2022　第 106 回日本陸上選手権」(BS1 9 日(木)後 6：00～8：15,10 日(金)後 6：30～7:30,11 日(土)～12 日(日)後 3:30～4:00,総合　10 日(金)後 7:30～8:42,11 日(土)～12 日(日)後 4:00～6:05)を見た。総合テレビの放送で、マルチ編成を行う際のサブチャンネルへの切り替え案内のアナウンスが競技中継の音声とかぶっていて聞き取りにくかった。視聴者により分かりやすい放送をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

これまではマルチ編成を実施する際、競技中継をいったん終えてサブチャンネルへの切り替え方法のおしらせを放送していたが、案内を見てからチャンネルを切り替えると肝心の場面を見逃してしまうとの指摘があった。そのため最近は競技中継を続けたままサブチャンネルの案内テロップとコメントを出すことにしている。競技中継の実況アナウンスと切り替え案内コメントが重なって聞き取りづらいとのご意見は担当部署に伝え今後の参考としたい。

○　５月２５日（水）の歴史探偵「鉄道開業 150 年」を見た。開通当時の品川－横浜間の鉄道を城の石垣のような石積みを造りあえて海の上に走らせたことに注目

した番組だったが、映っている鉄道が山の中を走っていた。視聴者も疑問に思ったと思うので、補足的なテロップがあったほうがよいと思った。

（ＮＨＫ側）

海の上を鉄道が走っていたことは、陸地から遺構が出てきて初めて裏付けられたことであり、海の上を走っていた映像は一切残っていなかった。映像を補う形で海上を鉄道が走る姿をＣＧで再現し番組のメインとした。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２１年度近畿地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて事前に視聴してもらった、探検ファクトリー「横浜中華街で大人気！中華鍋専門メーカー」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜探検ファクトリー「横浜中華街で大人気！中華鍋専門メーカー」
（４月３０日（土）後０：２０～０：４５）について＞

○　終始おもしろく見た。中華鍋の製造工場を取り上げていたが、実際に使っている料理人の話も紹介しておりよかった。この番組では他にもさまざまな工場を取り上げているとのことで、マニアックな題材であっても、家族でも楽しめ、共感が得られるように伝えていることはすばらしいと感じた。

○　プレス加工で作れば簡単にできる中華鍋の成形を３０分かけて打ち出していく工程はとても興味深いもので、まさに日本のものづくりの技術だと感じた。後継者が不足しているという問題もあるかと思うが、このような日本が誇る技術を後

世まで伝えて欲しいと思う。日本経済の下支えをしているともいえる、専門技術を持つ小さな工場にスポットをあてた番組はとても意義深く、引き続きいろいろな工場や技術を取り上げてほしい。

○　何気なく食べている中華料理の背景に中華鍋をつくる職人の優れた技術、努力や工夫があることが分かるよい番組だった。業務用の中華鍋だけではなく家庭用のものも製造しているとのことで、購入したいと感じた視聴者もいると思うが、製品の価格を明示しなかった理由が知りたい。また、以前に比べると家族でテレビを視聴することが減ってきたと言われるが、大人も子どもも興味深く見ることができ学びがあるこのような番組によって、家族での視聴が復活する可能性もあるのではないかと感じた。

○　構成や演出がＮＨＫらしくないと感じていたが、番組の放送表示に制作会社名がクレジットされており、外部制作の番組だと分かった。見ていて楽しくよい番組だったが、ＮＨＫの番組において、本体制作と外部制作がどの程度の比率なのか、外部制作の場合に全体の制作体制はどうなっているかについても教えてほしい。

○　構成もよく、製品の機能の検証もされておりあっという間に見終えた。知らなかったことを知ることができ、家族全員で見られるよい番組だった。うろこ状の鍋肌に油がなじむ映像は料理番組でよく見ることがあるが、その製造の工程を見ることができ感動した。大量生産と大量消費の社会の中で、人の手によって丁寧に作られたものが横浜中華街でのシェア１位ということが分かりうれしくなった。番組内で製品の価格が紹介されていてもよかったと思う。

○　日常的に使用する道具がどのように作られているかは多くの人にとって興味のあることで、楽しく見させてもらった。リラックスしながら見ることができ、好奇心もくすぐられ、土曜日の昼間に見るにはちょうどよい番組だと思う。打ち出し式で製造した中華鍋とプレス式で製造した中華鍋について、サーモグラフィーを使って温度の比較実験をしていたのも双方の違いが分かりやすかった。

○　かつて日本にはこういった技術を持った製造業がたくさん存在していたが、生産の海外移転にともない国内製造業の空洞化が叫ばれて久しいなかで、この番組の視

点はよいと感じた。こういった技術を伝承していきたいという若い人たちが多くいることは事実で、この番組を通じてその人たちの心に火が付くとよいと思った。内容としてはバラエティ感がありおもしろく気軽に見た。出演していたタレントが中国語のまねのような表現を何度も使っていて気になった。

○　ニッチな題材だが、番組で取り上げることによって日本の伝統的な技術やものづくりの精神を知る機会になると感じ、興味深く見た。中華鍋の熱伝導率が普通の鍋に比べてよいという検証については、「水が早く沸騰した」といった抽象的な表現だったので、具体的な数字を提示するなどすればよりよい検証になったのではないかと思う。

○　たたくことによって分子が詰まることや、金属が強くなること、そのように作られた中華鍋の耐久性や熱伝導のよさなど改めて職人技のすごさが伝わった番組だと思う。この時間帯のお茶の間向け番組としては重すぎず軽すぎず、ちょっと心に残るよい番組だった。ただ、“大阪のおばちゃん”に扮していた男性タレントの位置づけが少し分かりづらかった。また、この番組に限らず、ＮＨＫでは“大阪のおばちゃん”をどのようなコンセプトに基づいて描いているのか聞きたい。

○　大人の社会科見学というコンセプトでの、丁寧な番組作りがよかった。中華鍋のメリットを分かりやすくテロップでまとめていたり、出演者が実際に体験したり、熱伝導の検証や市場調査などさまざまな工夫がされていた。今回取り上げられたのは横浜の製造メーカーなので大阪局が制作する意味はどこにあったのか疑問に感じた。

○　２５分という番組尺の中で、中華鍋づくりの工程やお店での使われ方、工場の歴史、検証実験など中華鍋だけでいろいろ掘り下げていたことがすばらしかった。番組のタイトルロゴやタレントの似顔絵アイコンも可愛らしく、テロップの文字デザインや色が見やすくてよかった。出演している２組のタレントの役割に棲み分けができていないように思い、どちらかで十分だと感じた。

（ＮＨＫ側）

中華鍋の家庭用製品価格を紹介しなかったことについては、宣伝とならない範囲の中でどう情報を伝えるかを考え制作したためだ。なお、視聴者ふれあいセンターでは購入先や値段についてもお答えしており、問い合わせへの対応という形で情報提供を行っている。出演しているタレントによる中国語のものまねについてのご意見をいただいたが、視聴者に不快な思いをさせない番組づくりは大切なことだと認識している。ＮＨＫの番組はＮＨＫ本体の制作だけでなく、受信料を放送文化として社会に還元したり、放送産業を育てたりする目的もあり、本体の管理のもとで関連団体や外部制作会社に委託する場合もある。

（ＮＨＫ側）

熱伝導の検証については、どこまで詳しく表現するかは悩みながら制作したが、今後は具体的な数字も交えていきたい。出演しているタレントが大阪のおばちゃんにふんしていることについては、この番組独自でそのキャラクターを表現しようとしているわけではなく、タレントの持ち芸をそのまま生かした演出としている。このタレントのコミュニケーション能力の高い一面を生かして、取材対象とのやりとりを円滑にする役割を担っている。

（ＮＨＫ側）

大阪放送局が最も力を入れていることとして、地域情報発信の核になるということがある。東京一極集中にならないよう、大阪・関西だけの情報ではなく、日本各地のさまざまな話題を大阪局が中心となって発信していく取り組みの一環で、この番組も大阪局が制作している。

＜放送番組一般について＞

○　４月２２日（金）のかんさい熱視線「新型コロナ“第６波”全国最多死者　大阪で何が」を見た。番組冒頭で、第７波への備えを検証するということを明示し、現状を定点観測していくという点でよかったが、高齢者施設以外の高齢者の感染状況がどうなっているのかについても詳しく説明してもよかったと思う。今後もウィズコロナの生活が続いていくと思うので、クラスターを起こさないような取り組みの事例など前向きな話題も紹介してほしかった。

○　第６波では大阪の感染者数が非常に多く、高齢者施設でクラスターが発生し、病床がひっ迫して入院できず施設で亡くなられた方もいるということが番組で語られていた。大阪市が整備した大規模医療・療養センターは介護を必要とする高齢者に対応できず、想定よりも利用者が大幅に少なかったというミスマッチがあったことは非常に残念な結果だ。人員不足もあって想定外なことに柔軟に対応できていないのが現状だろうと感じた。

○　大阪の新型コロナウイルスの感染状況、特に高齢者施設のクラスター問題を医療従事者と行政との双方から考える意義深い番組だった。高齢者施設と協力医療機関との関係のあり方、高齢者への早期治療の必要性など盛りだくさんの問題提起があったが、それぞれがとても分かりやすく、しかも時間内にきっちり収められていることにも感心した。特に、高齢者の方の命もおろそかにしない開業医の先生方のご尽力に感銘をうけた。今回は高齢者施設に焦点があてられていたが、当該施設でのクラスターの発生原因について気になった。

○　以前から新型コロナウイルスの報道について、過剰だと思っていたが、ようやく冷静なテンションになったのではないか。医療現場の方々の苦労は理解でき、そこに光をあてる必要はあると思うが、一方でこの問題の根本的な原因は国と行政の対応だと思っている。なぜこうなったのか、なぜ適切に手を打たなかったのかが知りたかった。

○　保健所の機能強化の必要性など、大阪の公衆衛生の状況が危機的なことがよく分かった。番組後半にスタジオで、感染症専門の臨床医師による原因の分析と今後の課題について解説があったが、ことばで聞いただけでは理解が十分できないと思うのでキーワードをテロップで出してくれればよかった。

○　大阪の新型コロナウイルスの感染率や死亡率が他府県と比較して高いことに疑問を感じている人も多く、自身もそう感じていた。番組の中で、感染が拡大した理由としてオミクロン株の出現やワクチンの３回目接種が遅れていたことが指摘されていたが、それはほかの都道府県も同じであると思うので、もう少し大阪ならではの要因について分析が欲しかった。感染症専門の医師が保健所など公衆衛生に関わる人が少ないと言っていたが、主観的な意見とも感じたので、他府県と数値比較するなどの分析があればよかったと思う。行政対応に原因があるとすれ

ば、そこについてより掘り下げて明らかにすることが報道の重要な使命だと思う。

○　大阪府が国内最多の死者数となったことや、コロナ禍が長期化していることによる気の緩みを伝えるためにこのような番組があるということはある程度理解できるが、一方で世界を見渡すと、ウィズコロナの生活をしている国も多数ある。ようやく平常を取り戻しつつあるので、もう少し見る人をポジティブにさせるような情報も欲しいと思った。

○　大阪で起こっていることを大阪府民や関西の人が知る機会となるよい番組だったが、新型コロナウイルスとは恐らく今後ずっとつきあっていくことになるので、もう少しポジティブな報道をしてもらえると、さまざまな活動が変わっていくのではないかと思う。

○　日々のニュースでも大阪府の感染者数が多いと感じており、その背景を知ることができたが、都道府県の人口比での感染者数比較や、感染数に対する死亡率などのデータがあればより客観的になったと感じた。死者数が全国最多で、多くの高齢者施設でクラスターが起こったことはまぎれもなく大阪の特徴であり、番組で指摘されていた公衆衛生に関わる医師が少ないことと、現状でもそれが理解されていないということも原因であると感じた。大阪では過去に保健所の統廃合もあり、そうした実態がもっと示されていたらなおよかった。出演していた医師の「救える命が救えなかった、早期介入ができていれば」という言葉が心に突き刺さり、やるせなさを感じた。

○　大阪府の現状や現在の方針、第７波への備えという３部構成でパターンなどを用いて視覚的に整理されており分かりやすかった。感染症専門の医師の「新型コロナウイルスは世界から消滅するのではなく、流行はずっと続いていく。それを想定した社会に変容していくべき」というコメントも明快でよかった。行政が第７波に向けてどう課題を解決していくかについても引き続き取材を続けてほしい。

○　大阪府の新型コロナウイルスによる死者数が全国最多というニュースは見ていたが、その原因を検証するという、突っ込んだ番組だった。人が亡くなった原因を探るというのは、どうしても犯人捜しのようなことになってしまうが、自治体、医療現場や高齢者施設など、様々な立場の方の意見を知ることができ、客観的に

まとめられていたと思う。

（ＮＨＫ側）

今回は大阪の死者数の多さに焦点を当て、行政側の取り組み、高齢者施設で何が起きていたかに注目して取材、制作した。引き続き視聴者が知りたい、必要な情報を届けていきたい。

（ＮＨＫ側）

「かんさい熱視線」では新型コロナウイルスについて何度も取り上げているが、今回は医療、介護、行政それぞれの当事者に取材をしながらそこから見えてくる問題をあぶり出していきたいと考え取材を続けてきた。第６波において、大阪で死者数が最多だった確定的な原因を言うことは難しく、極力当事者の声から見えて来るものを伝えることができればと思っている。

○　番組の種別ごとの放送時間についての報告にあった「番組の調和原則」について、大相撲が始まると総合テレビで長時間中継をしたり、国会中継も連日放送することがあるが、定時番組と異なる編成を行う際には番組種別のバランスをどのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

種別ごとの放送時間については、年間でバランスを保ち番組調和の原則を満たすという考え方に基づいている。スポーツ中継番組は性質上長時間の放送になることが多いが、放送する時期は限定的で、年間を通してみると調和が取れた番組比率となっている。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「ほっと関西サタデー」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　　雅廣（大阪市立美術館　名誉館長）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「ほっと関西サタデー」（４月９日（土）後６：０５～６：５９）について＞

○　紹介された一つ一つの情報がよかった。また、全国放送の番組ではあまり見られない、地元出身タレントの知られざる一面が見られたのもよかった。一方、リラックスして親しみやすい番組にという演出意図から、出演者同士のやり取りを多くしたのだと思うが、うまくかみ合っていない部分があった。キャンピングカーの紹介では、外に出て自ら体験してみるという視聴者に寄り添った企画だったが、泊まらなかったのが残念で、結果としてキャンピングカーの良さが伝わりにくかった。

○　土曜１８時はリラックスした雰囲気で放送を見ることができる時間帯だが、特にキャンピングカーを紹介したコーナーでは映像がめまぐるしく変わるなど、番

組コンセプトのようにゆったり見ることができるのか疑問に感じた。また、ＶＴＲとゲストの掛け合いの音声がかぶってしまうところが気になった。

○　住んでいても知らないような、関西のさまざまな地域の情報を知ることができるこうした番組が増えてありがたい。キャンピングカーの話題については、ほかにもあるさまざまな種類のキャンピングカーの紹介や泊まる時の注意点なども伝えてくれたらなおよかった。

○　関西の地元に密着した情報で、特に世界情勢などからも第 1 次産業の重要性が注目される中で随所に農業の話が取り入れられておりよかった。キャンピングカーの話題は、災害時の簡易的な宿泊設備として家族でも利用できそうなので興味深く見た。泊まることをためらったのは、真っ暗な場所に一人で泊まることの不安を率直に言ったのではないか。キャンピングカーを利用した時の治安の問題がどのように解決されているのかが紹介されていればよかった。全体として文化的な話題が豊富でよかったが、スタジオセットがにぎやか過ぎると感じたので、どのようなコンセプトで制作されたのか気になった。

○　ゲストが的確なコメントをしており好印象だった。週末なのでリラックスして見てほしいと言っていたわりに、やや慌ただしい感じがあったのでもう少し落ち着いて進行した方がよかったのではないか。ニュースキャスターにプライベートでの最近のニュースを尋ねたり、ゲストの話を聞き終えず次の話題に移ったりしていたので、ゲストやＶＴＲを生かして控えめに話をした方がよいと感じた。全体を通して、少し「引き算」をすればより見やすい番組になると思う。

○　コンテンツの選択肢が多い時代にあって、ラジオのように聞き流すにはよいかもしれないが、あえて選んでテレビの前で見ようとは思えない番組だった。音声のかぶりが気になった。

○　天気予報やニュース、各地の話題もあり、内容が盛りだくさんで、各地の情報をたくさん知ることができた。キャンピングカーの話題では、キャンピングカー自体の情報、特にトイレや電気などの情報があればなおよかったと思う。レジャー関連の情報に興味がある人は多いと思うので、土曜の夕方にこういった番組を届けてくれることはありがたく、次回にも期待したい。

○　休日の１８時にローカルな情報とニュースを合わせて、リラックスして届けようという新しい試みに感心した。個々の情報は充実していたが、全体的にニュースと情報パートの境目がなく不自然だった。番組冒頭に各地の話題のインデックスが画面に表示されたと思ったら、いきなり新型コロナウイルスのニュースになり、それが終わったらまた地域の情報に戻るなど、切り替わりについていくのが大変だった。今後試行錯誤してよい形を作り上げて欲しい。

○　はじめは、ニュースとバラエティーの融合という印象で既視感があったが、見進めると情報が充実していて見応えがあり、土曜の夕方にリラックスして見られた。よかった点としては、アナウンサーの表情やことばづかいが飾りすぎず自然体で好感が持てた。この番組に限ったことではないが、テロップの視認性がよくないと以前から思っており、もう少し見やすくなるとなおよいのではないかと思う。

○　作ってほしいと思っていた地方を取り上げた番組が具現化された。内容が盛りだくさんでありながら全体的にまとまっていた。スタジオのかけあいがよく、アナウンサーも飾り気がなく明るく自然体で進行していてとてもよかった。地域の話題も定番ではない情報が多く、バラエティーに富んでいた。滋賀県のミードの話題は、世界最古のお酒ということで最初は学術的なアプローチかと思いきや、若者の夢のまわりに人々が集まる話であり、地方の新しい生き方を示してもらった。今後もこのような情報を発信してほしい。ＶＴＲとゲストの掛け合いの音声がかぶっていたが、逆にスタジオとお茶の間の一体感を感じた。また、キャンピングカーに女性アナウンサーが泊まらなかったのは自然なことだと思った。土曜の１８時というと、夕食の支度や食事の時間帯であるので、気軽に見られる非常によい番組だと思う。

○　背景のセットが過剰だと感じた。春先なのでカラフルな印象にしたということかもしれないが、スタジオ全体を映すとアナウンサーとゲストの見分けがつきにくくなっていたので、出来るだけシンプルにした方がよいと思う。アナウンサーとゲストの会話がうまくかみ合っていないところは生放送ならではの臨場感があったが、妙にはしゃぎすぎているとも感じた。

（ＮＨＫ側）

大阪放送局として地域にいかにサービスできるかを考えて放送を開始した。生放送ならではの臨場感や、親しみやすい雰囲気を視聴者の皆さんにどう伝えていくのかは、大きな課題であり、引き続き試行錯誤していきたい。

（ＮＨＫ側）

セットについては、生放送の活気や地域の情報のごった煮感といった番組コンセプトから、あえて少しにぎやかなものにしている。ＶＴＲとスタジオの掛け合いの音声がかぶって聞き取りづらかったことについては、今後コメントの内容やタイミングの精度を上げていく。アナウンサーの進行については、自然体で堅苦しくなく伝えていきたいという思いで議論を重ねており、いただいたご意見は今後に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月３日（木）、１０日（木）のバリバラ「水平社宣言 100 年」を見た。司会の方が作り出す空気感がすばらしかった。難しいテーマで暗い番組になりそうなところも、出演者につっこみを入れたり言いづらいことに言及するなど、少しでも見やすい番組にしようとしている印象を受けた。出演者の方々の、自分の体験や経験を活かした生の声が聞けることが、この番組ならではだと感じた。

○　部落問題の時代背景や歴史、系譜が語られる中で、当事者が出演してコメントするなど、暗くなりそうなテーマだったが、そうはならずうまくまとめられていた。水平社についてあまり知識がなかったが、改めて考えるよい機会になった。

○　水平社宣言を中心として、障害のある人や、被差別部落出身者の声がきけて中身が濃い番組だった。水平社を設立した人の中には女性が一人もいなかったと出演していた女性が言っていたが、差別を受けてきた部落にあっても女性というだけでさらに差別を受けてきたのだと感じた。水平社宣言の全文を番組の最初に読み上げてくれるとなおよかった。

○　水平社の歴史がわかりやすく説明されていた。性、障害、多国籍などダイバー

シティを意識した番組作りになっていて、マイノリティの方々を勇気づけるような作りになっていた。最初はナレーションのアニメのような語り口が気になったが、軽快な調子でむしろ暗い雰囲気にならずに内容を理解できる効果があったのではないか。女性、障害者の方、部落の方の間で、差別という同じ根底的な問題を共有できると思うので、ともに解決していくべきダイバーシティの問題を提起していた点もよかった。

○　人間は同情するものではなく尊敬すべきもの、というメッセージがしっかりと伝わってきた。障害があったり被差別部落で育ったりと、さまざまな苦労がありながらも前向きに生きている方々が、自分たちのことばで水平社宣言を語っており非常によかった。司会の方は、最初は服装も含めキャラクターが浮いているのではないかと感じていたが、出演者をうまくまとめていたと思うし、ナレーションも味があってよかった。子どもにも見てもらいたい番組だ。

○　よく取材をして恐れず制作・放送されていると感じ、感動した。この番組が放送開始した当初はさまざまな苦労や批判があったかと思うが、根気強くマイノリティに光を当て続けた結果、柔らかな表現で社会に学びを与えるコンテンツとしての地位を確立できたのだろうと感じた。

○　番組の時間の問題があるにしても水平社宣言の全文を一度は読んでほしかった。出演者のそれぞれの経験に基づくコメント一つ一つに無駄がなく、水平社宣言が私たち一人一人に関係があるということをしっかりと伝えていた。部落問題が出発点だった人たちが、現代社会のほかの課題解決にも立ち向かっていることにとても感銘し、自身も社会の一員として取り組まないといけないと感じさせられた。

○　改めて部落差別という根深い問題を考える契機をもらった。重い気持ちになる番組でもあったが、とてもよく取材されているし、障害があったり被差別部落にルーツのある出演者の方々が、自身の立場や経験から実感のこもった発言をされていたので心に入ってきた。ＮＨＫはこのようなよい番組をたくさん放送しているが、放送時間に合わせて見るというのは現代の生活の中では大変難しい。番組数や配信期間を限定せず、すべての番組をいつでもどこでもいつまでも見られるようにすれば、ＮＨＫは世界に誇るコンテンツホルダーになるのではないかと思う。すばらしい番組が末永く見られる環境を作ってほしい。

○　障害者と被差別部落の問題を同様に考えることには少し違和感があったが、マイノリティの前に立ちはだかる社会的な壁に向き合う一つのきっかけとして、水平社宣言を取り上げたことは貴重だし、アンタッチャブルとされることもあるこの問題を、オープンかつ明るさも持って取り上げられたのには隔世の感もあった。被差別部落の女性を主人公としたドラマ制作などにも挑戦してほしい。

○　障害やジェンダーの問題、戦争など強者が弱者を圧迫することが世界的に起こっている状況で、こうしたテーマを今あらためて取り上げたことは意義深い。水平社宣言の全文は、今のわれわれにも通じる内容であるので、きちんと読み上げたほうがよいと思う。また、民権運動や大正デモクラシーの文脈で語ることでより深みを増したのではないか。部落問題については、引き続き発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

水平社宣言から 100 年というタイミングで、当事者に話を聞くということを一つのチャレンジとして制作した。水平社についてどう伝えていくかは非常に難しかったが、生の声に勝るものはないというところから当事者の方々に出演いただいた。

（ＮＨＫ側）

ことしでバリバラは放送開始から１０年を迎えた。番組が始まった当初は障害者のための番組として、障害者自身が制作段階から関わってきた。2016 年からマイノリティ全般を取り上げるようになり、部落問題は今回で３回目となる。今回は水平社宣言から 100 年ということで、部落問題を中心としているが、人権問題を通して大切なメッセージを見いだし、さまざまなマイノリティの方たち、あるいは孤立して生きづらさを感じているすべての人たちをエンパワーメントしていくような番組にしたいと思い制作した。水平社宣言の全文紹介については、限られた時間の中で今回は当事者のメッセージをしっかり伝えることを優先した。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局